
東松山市

**西浦／野本氏館跡／
山王裏／錢塚**

道路改築工事（埋蔵文化財発掘調査(整理)業務委託）
一般国道407号東松山バイパス（東松山市高坂地内外）
埋蔵文化財発掘調査報告

2007

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 西浦遺跡、野本氏館跡遠景（南東から）



2 鉢塚遺跡遠景（奥に西浦遺跡他を囲む 南から）



1 野本氏館跡第2号住居跡遺物出土状況



2 野本氏館跡第1号住居跡出土遺物



3 野本氏館跡第2号住居跡出土遺物

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念として掲げ、誰もが安心・安全・快適に通行できる道路空間を形成するとともに、環境にも十分配慮した道づくりを推進しています。県民の活発な交流や盛んな経済活動が行われるためには、誰もが円滑に移動できる道路網の整備が必要であり、埼玉県では「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」を目標として、バイパスの整備や幹線道路の拡幅、市街地を迂回する環状道路の整備などに取り組んでいます。一般国道407号東松山バイパスの整備もそのひとつであり、東松山市街地の渋滞を緩和し、交通を円滑化するバイパスとして、その整備が急務となっておりました。

東松山市は埼玉県のほぼ中央に位置する、比企地方の拠点都市です。市野川、都幾川、越辺川などの諸河川によって育まれた自然豊かな地であり、歴史的に見ても中世に松山城が築かれて以来、交通の要所となり、商業都市として栄えてまいりました。

今回の道路建設予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地（西浦遺跡・野本氏館跡・山王裏遺跡・銭塚遺跡）の所在が知られていました。その取り扱いについて、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県土木部道路建設課（当時）の委託を受けて当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、西浦遺跡・野本氏館跡では弥生～古墳時代の竪穴住居跡や溝跡が発見され、多くの土器が出土しました。また山王裏遺跡・銭塚遺跡では中世～近世の溝跡や土坑などが発見され、東松山市の歴史を解明する上で貴重な資料が得られました。本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県県土整備部道路街路課、東松山県土整備事務所、東松山市教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 福田陽充

例言

1. 本書は東松山市大字上野本・下野本に所在する西浦遺跡第5次、野本氏館跡第2次、山王裏遺跡第7次調査、および東松山市大字高坂に所在する銭塚遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

西浦遺跡(5次)(No.34-168 略号:NSUR)

埼玉県東松山市大字上野本字西浦 1695-2 他
平成9年6月20日付け教文第2-60号

野本氏館跡(2次)(No.34-163 略号:NMT)

埼玉県東松山市大字下野本字下野本 663-3 他
平成9年6月20日付け教文第2-59号

山王裏遺跡(7次)(No.34-160 略号:SNNUUR)

埼玉県東松山市大字上野本 2181 他
平成11年5月24日付け教文第2-26号

銭塚遺跡(1次)(No.34-369 略号:ZNDK)

埼玉県東松山市大字高坂字銭塚 290-2 他
平成15年6月4日付け教文第2-16号

3. 発掘調査は一般国道407号東松山バイパス(東松山市地内)建設事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課(当時)が調整し、埼玉県土木部道路建設課(当時)の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 一般国道407号東松山バイパス(東松山市地内)建設事業に伴う発掘調査報告書は下記の通り刊行されている。

『山王裏/上川入/西浦/野本氏館跡』

事業団報告書第184集 1997

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。

西浦遺跡第5次および野本氏館跡第2次調査は平成9年5月1日から平成9年7月31日まで、

新屋雅明・上野真由美が担当して実施した。

山王裏遺跡第7次調査は平成11年4月8日から平成11年5月31日まで、田中正夫・大谷徹が担当して実施した。

銭塚遺跡第1次調査は平成15年5月1日から平成15年7月31日まで、伴瀬宗一・池田恵美子が担当して実施した。

整理報告書作成事業は平成18年12月1日から平成19年3月23日まで、菊地 真が担当して実施し、事業団報告書第340集として印刷・刊行した。

5. 発掘調査における基準点測量は、西浦遺跡および野本氏館跡では株式会社バスコに、山王裏遺跡では株式会社東京航業研究所に、銭塚遺跡では株式会社GIS関東に委託した。
6. 発掘調査における空中写真撮影は、西浦遺跡および野本氏館跡では株式会社バスコに、銭塚遺跡ではGIS関東に委託した。
7. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は大屋道則が撮影した。
8. 本報告書の出土品の整理・図版作成は菊地が行い、磯崎 一、鈴木孝之、大谷、上野の協力を得た。
9. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が行い、その他を菊地が行なった。
10. 本書の編集は、菊地が行った。
11. 本書に掲載した資料は、平成19年度以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
12. 発掘調査から整理・報告書の刊行に至るまで、以下の機関・方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します(敬称略)。
東松山市教育委員会 吉見町教育委員会
江原昌俊 太田賢一 菊地有希子 佐藤幸恵
宮島秀夫 弓 明義

凡例

1. 本書中におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点:北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく座標値(m)を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。座標値は全て日本測地系(旧測地系)のものを世界測地系(新測地形)に換算し、世界測地系の数値で表示した。座標の換算値は以下の通り。

西浦遺跡・野本氏館跡 BZ-10グリッド北西枕。(旧) X=-1800.0000 m, Y=-37800.0000 m。北緯36°00'55.77199", 東経140°15'09.87749"。(新) X=-2154.5251 m, Y=-37506.4441 m。北緯36°01'07.31039", 東経140°14'58.03348"。

山王裏遺跡 C-50グリッド北西枕。(旧) X=-2550.0000 m, Y=-37400.0000 m。北緯36°01'20.16518", 東経140°14'54.02793"。(新) X=-2904.5169 m, Y=-37106.4713 m。北緯36°01'31.70028", 東経140°14'42.18525"。

錢塚遺跡 B-2グリッド北西枕。(旧) X=-6800.0000 m, Y=-37950.0000 m。北緯36°03'38.00112", 東経140°15'16.73293"。(新) X=7154.4370 m, Y=-37656.5399 m。北緯36°03'49.51955", 東経140°15'04.88551"。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づいて設置し、10 m×10 m方眼を基本グリッドとしている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、南北方向は北から順にA・B・C…、東西方向は西から1・2・3…とした。(例 C-2グリッド)
4. 本書の本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

SJ 竪穴住居跡 SD 溝跡
SK 土坑 P ピット

5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりであ

る。但し、一部例外もある。

全体図 1:100 1:250 1:300 1:400

遺構図 1:150 1:250 1:60 1:40
1:30

土器 1:4、鉄製品 1:2

土器拓影図・磁器・土製品・石製品 1:3

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示しており、単位はメートル(m)である。
7. 実測図の表記方法は以下の通りである。須恵器は断面を黒塗りにし、施釉陶器、彩色土器については施釉・彩色範囲を網かけて示した(緑釉20%・断面40%、灰釉10%・断面40%、赤彩10%、黒色土器30%)。
8. 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

・口径・器高・底径の計測値はセンチメートル(cm)、重さはグラム(g)単位とする。

・()内の数値は復元推定値、[]内の数値は残存値である。

・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

雲:雲母 片:片岩 角:角閃石 長:長石
英:石英 砂:砂粒子 赤粒:赤色粒子
白粒:白色粒子 黒粒:黒石粒子 礫:小礫
針:白色針状物質

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。

・色調は、[新版標準土色帖]2002(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色標監修)を基に、通用表記とした。

・残存率は、器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000、東松山市発行の都市計画図1/2,500を使用した。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	IV 野本氏館跡	19
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 遺跡の概要	19
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 弥生時代の遺構と遺物	19
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	3. 古代以降の遺構と遺物	25
II 遺跡の立地と環境	5	V 山王裏遺跡	33
1. 地理的環境	5	1. 遺跡の概要	33
2. 歴史的環境	6	2. 検出された遺構と遺物	33
III 西浦遺跡	9	VI 銭塚遺跡	41
1. 遺跡の概要	9	1. 遺跡の概要	41
2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物	9	2. 検出された遺構と遺物	43
3. 平安時代の遺構と遺物	16	VII 調査のまとめ	62
4. その他の遺構と遺物	18	写真図版	

挿 図 目 次

第1図	調査区的位置	3	第30図	溝跡平面図(1)	35
第2図	埼玉県 の 地 形	5	第31図	溝跡平面図(2)	36
第3図	東松山周辺 の 地 形	6	第32図	溝跡断面図	37
第4図	周辺 の 遺 跡	7	第33図	第31号溝跡	38
第5図	西浦遺跡全体図	10	第34図	溝跡出土遺物	39
第6図	第47号住居跡	11	第35図	土坑	39
第7図	第47号住居跡出土遺物	12	第36図	遺構外出土遺物	40
第8図	第48号住居跡	13	第37図	錢塚遺跡全体図	42
第9図	第48号住居跡遺物出土状況	14	第38図	錢塚遺跡基本層序	43
第10図	第48号住居跡出土遺物	15	第39図	第1号住居跡	44
第11図	第49号住居跡	16	第40図	第1号住居跡出土遺物	44
第12図	第49号住居跡出土遺物	17	第41図	溝跡平面図(1)	46
第13図	第322号土坑	18	第42図	溝跡平面図(2)	47
第14図	遺構外出土遺物	18	第43図	溝跡平面図(3)	48
第15図	野本氏館跡基本層序	19	第44図	溝跡出土状況・断面図(1)	49
第16図	野本氏館跡全体図	20	第45図	溝跡断面図(2)	50
第17図	第1号住居跡	21	第46図	溝跡出土遺物	52
第18図	第1号住居跡遺物出土状況	22	第47図	土坑	53
第19図	第1号住居跡出土遺物	23	第48図	第17号土坑出土遺物	54
第20図	第2号住居跡	24	第49図	ピット	55
第21図	第2号住居跡遺物出土状況	25	第50図	遺構外出土遺物出土状況	57
第22図	第2号住居跡出土遺物	26	第51図	遺構外出土遺物(1)	58
第23図	溝跡平面図(1)	28	第52図	遺構外出土遺物(2)	59
第24図	溝跡平面図(2)	29	第53図	遺構外出土遺物(3)	60
第25図	溝跡断面図・土坑	30	第54図	西浦遺跡・野本氏館跡の遺構分布(弥生~古墳初期)	62
第26図	溝跡出土遺物	31	第55図	西浦遺跡・野本氏館跡の遺構分布(中世ほか)	63
第27図	遺構外出土遺物	32	第56図	西浦遺跡・野本氏館跡・山王裏遺跡遺構配置	65
第28図	山王裏遺跡基本層序	33	第57図	調査地点周辺 の 微 地 形	66
第29図	山王裏遺跡全体図	34			

表 目 次

第1表	第47号住居跡出土遺物観察表	12	第7表	溝跡出土遺物観察表	30
第2表	第48号住居跡出土遺物観察表	14	第8表	遺構外出土遺物観察表	32
第3表	第49号住居跡出土遺物観察表	17	第9表	溝跡出土遺物観察表	39
第4表	遺構外出土遺物観察表	18	第10表	ピット一覽	40
第5表	第1号住居跡出土遺物観察表	23	第11表	遺構外出土遺物観察表	40
第6表	第2号住居跡出土遺物観察表	24	第12表	第1号住居跡出土遺物観察表	45

第13表	溝跡出土遺物観察表	50
第14表	第17号土坑出土遺物観察表	54
第15表	ピット一覽	56

第16表	遺構外出土遺物観察表	61
第17表	遺構名新旧対応表	61

写真図版目次

図版 1	1 西浦遺跡・野本氏館跡・山王裏遺跡遠景 (南東から)	図版 9	1 第1号住居跡遺物出土状況 1
	2 西浦遺跡・野本氏館跡全景 (北西から)		2 第1号住居跡遺物出土状況 2
図版 2	1 西浦遺跡全景 (南西から)	図版10	1 第1号住居跡遺物出土状況 3
	2 第47号住居跡遺物出土状況 1		2 第1号住居跡遺物出土状況 4
図版 3	1 第47号住居跡遺物出土状況 2		3 第1号住居跡遺物出土状況 5
	2 第47号住居跡		4 第1号住居跡
	3 第48号住居跡遺物出土状況 1		5 第2号住居跡遺物出土状況 1
	4 第48号住居跡遺物出土状況 2	図版11	1 第2号住居跡遺物出土状況 2
	5 第48号住居跡遺物出土状況 3		2 第2号住居跡遺物出土状況 3
図版 4	1 第48号住居跡遺物出土状況 4	図版12	1 第2号住居跡遺物出土状況 4
	2 第48号住居跡遺物出土状況 5		2 第2号住居跡遺物出土状況 5
	3 第48号住居跡	図版13	1 第2号住居跡遺物出土状況 6
	4 第322号土坑		2 第2号住居跡遺物出土状況 7
	5 第49号住居跡		3 第2号住居跡
図版 5	1 第47号住居跡 (第7図1)		4 第23号・第22号溝跡
	2 第47号住居跡 (第7図2)		5 第23号溝跡
	3 第48号住居跡 (第10図1)		6 第22号溝跡
	4 第48号住居跡 (第10図6)		7 第24号溝跡
	5 図版5-3 文様拡大1		8 第25号溝跡
	6 図版5-3 文様拡大2	図版14	1 第1号住居跡 (第19図1)
図版 6	1 第48号住居跡 (第10図2)		2 第2号住居跡 (第22図1)
	2 第48号住居跡 (第10図3)		3 第2号住居跡 (第22図2)
	3 第48号住居跡 (第10図4)		4 第2号住居跡 (第22図3)
	4 第48号住居跡 (第10図9)		5 第1号住居跡 (第19図2)
	5 第49号住居跡 (第12図4)		6・7 第2号住居跡
	6 第49号住居跡 (第12図7)	図版15	1~17 第1号・第2号住居跡、遺構外
	7 第49号住居跡 (第12図10)		18~23 第23号溝跡
	8 第49号住居跡 (第12図12)	図版16	1~5 第22号・第24号・第25号溝跡
図版 7	1~19 第47号・第48号住居跡		6 瓦 (第26図11)
	20~26 第49号住居跡		7 土製品 (第26図8)
図版 8	1 野本氏館跡全景 (北から)		8~10 石器
	2 野本氏館跡全景 (南から)	図版17	1 山王裏遺跡全景 (南西から)
			2 山王裏遺跡調査区南西部全景 (北東か

	ら)	2	第5号・第6号土坑
図版18	1 第33号・第36号溝跡	3	第7号土坑
	2 第32号・第34号・第35号溝跡	4	第8号土坑
	3 第31号溝跡硬化面検出状況	5	第9号土坑
	4 第31号溝跡	6	第10号土坑
	5 第32号溝跡	7	第11号土坑
	6 第33号溝跡	8	第12号土坑
	7 第34号・第35号溝跡	図版26	1 第13号土坑
	8 第36号溝跡	2	第14号土坑
図版19	1 第37号溝跡	3	第15号土坑
	2 第38号・第39号溝跡	4	第16号土坑
	3 第40号溝跡	5	第16号土坑遺物出土状況
	4 第62号土坑	6	第17号土坑遺物出土状況
	5 第63号土坑	7	第18号土坑
	6 第64号土坑	8	第19号土坑
図版20	1～10 山王裏遺跡出土遺物	図版27	1 第1号住居跡(第40図3)
	11 銭塚遺跡遠景(南西から)	2	第6号溝跡(第46図17)
図版21	1 銭塚遺跡全景	3	遺構外出土(第51図1)
	2 第1号・第2号溝跡	4	遺構外出土(第51図2)
図版22	1 第1号住居跡	5	遺構外出土(第51図6)
	2 第1号住居跡遺物出土状況	6	遺構外出土(第52図2)
	3 第1号溝跡磔出土状況	7	遺構外出土(第52図4)
	4 第1号溝跡(東西)	8	遺構外出土(第53図1)
	5 第2号溝跡(東西)	9	遺構外出土(第53図8)
	6 第3号溝跡	10	遺構外出土(第53図10)
図版23	1 第4号溝跡	図版28	1 遺構外出土(第51図5)
	2 第5号溝跡	2	遺構外出土(第51図8)
	3 第6号溝跡	3	遺構外出土(第51図10)
	4 第9号溝跡	4	遺構外出土(第51図11)
図版24	1 第8号溝跡	5～7	第1号住居跡
	2 第10号・第11号溝跡	図版29	1～10 第1号・第2号・第5号・第10号・ 第11号溝跡
	3 A-1グリッド遺物出土状況1		11～17 第6号溝跡
	4 A-1グリッド遺物出土状況2	図版30	1～10 遺構外出土
	5 D・E-6グリッドピット		11～12 第17号土坑
	6 第1号土坑		13 板碑(第46図6)
	7 第2号土坑		14 紡錘車(第53図13)
	8 第3号土坑		15～18 土鍾
図版25	1 第4号土坑		

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、増加する交通量に対処するため県内道路交通網の整備を推進している。一般国道407号については、交通量の増加にともなう慢性的な交通渋滞の解消と県中央部における幹線交通網の整備を目的として、建設事業が計画された。

埼玉県教育局生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきている。

一般国道407号東松山バイパス建設事業に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、平成2年度に野本地内の計画用地に関して道路建設課長（当時）より照会があり、西浦遺跡（34-168）、野本氏館跡（34-163）、上川入遺跡（34-338）、山王墓遺跡（34-160）等について回答した。これらの遺跡については平成3年度から平成7年度にかけて数々にわたり発掘調査が実施され、報告書も刊行済みである。

その後、平成10年度には再度、山王墓遺跡（34-160）地内の用地に関して道路建設課長より、さらに平成13年度には錢塚遺跡（34-369）について道路街路課長より、埋蔵文化財の所在及び取扱いに関して照会があった。

これを受けて文化財保護課（当時）では、試掘調査等を実施し、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて「工事計画やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施」することを回答した。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、東松山県土整備事務所、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

発掘調査期間は以下のとおりである。

西浦遺跡（5次）：平成9年6月1日～7月31日

野本氏館跡（2次）：平成9年6月1日～7月31日

山王浦遺跡（7次）：平成11年4月8日～5月31日

錢塚遺跡（1次）：平成15年5月1日～7月31日

各遺跡の調査に先立ち、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3（現第94条）の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からは、文化財保護法第57条第1項（現第92条）の規定による発掘調査届が提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

西浦遺跡（5次）：平成9年6月20日付け教文第2-60号

野本氏館跡（2次）：平成9年6月20日付け教文第2-59号

山王浦遺跡（7次）：平成11年5月24日付け教文第2-26号

錢塚遺跡（1次）：平成15年6月4日付け教文第2-16号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

西浦遺跡・野本氏館跡

西浦遺跡、および野本氏館跡の発掘調査は、平成9年5月1日から平成9年7月31日まで実施した。調査面積は西浦遺跡が200㎡、野本氏館跡が800㎡である。

5月より事務手続き、事務所設置、および調査区の表土除去に着手した。調査区はJ A埼玉中央野本支店の北西に接する長さ50m程の範囲(野本氏館跡)と、その南西20mに位置する一辺約17mの三角形の範囲(西浦遺跡)である。

表土除去作業終了後、基準点測量を実施し、補助員による遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次、土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。検出された遺構は住居跡、溝、土坑である。7月中旬には調査区の航空写真を委託して撮影した。7月下旬に器材撤出、事務所撤収、調査区埋め戻し、事務処理等を行い、調査を全て終了した。出土遺物は弥生時代、平安時代の土器などであり、西浦遺跡でコンテナに3箱、野本氏館跡でコンテナに5箱出土した。

山王裏遺跡

山王裏遺跡の発掘調査は、平成11年4月8日から平成11年5月31日まで実施した。調査面積は1,700㎡である。

4月に事務手続き、事務所の設置を行い、直ちに調査区の表土除去に着手した。調査区は国道254号(旧道)の下野木(北)交差点から南西に向かって60mに亘る。

表土除去作業終了後、基準点測量を実施し、補助員による遺構確認作業を行い、調査を開始した。順次、土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。検出された遺構は溝、土坑などである。5月下旬には調査区的全景写真を撮影し、その後、器材撤出、事務所撤収、調査区埋め戻し、事務処理等を行っ

て、調査を終了した。出土遺物は縄文土器、須恵器などコンテナ1箱である。

銭塚遺跡

銭塚遺跡の発掘調査は、平成15年5月1日から平成15年7月31日まで実施した。調査面積は3,500㎡である。

事務手続きの後、5月から事務所設置、表土除去を実施した。調査区は都幾川南岸の堤防から南西に長さ80mに亘って広がる。5月中旬より補助員による遺構確認作業、基準点測量を行い、調査を開始した。順次、土層断面図、平面図等の作成、写真撮影を行った。検出された遺構は住居跡、溝、土坑などである。7月中旬に調査区の航空写真を委託して撮影した。7月下旬に器材撤出、事務所撤収、調査区埋め戻し、事務処理等を行い、調査を全て終了した。出土遺物は土師器、須恵器、陶器などコンテナに8箱出土した。

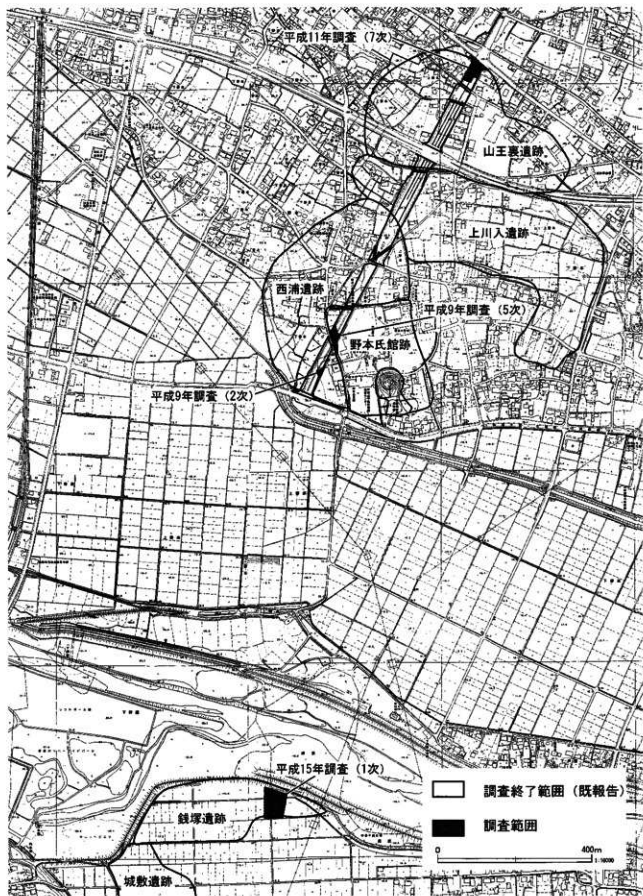
(2) 整理・報告書の作成

整理作業は、平成18年12月1日から平成19年3月23日まで行った。

12月初から、出土遺物の水洗・注記を行い、続いて遺物の接合・復元作業、写真や図面整理を開始した。遺構図は図面整理を経て第二原図を作成し、スキャナーで読み込んだ後にコンピュータによるデジタルトレース作業、および上層注記を挿入し編集作業を行った。

遺物は復元が終了したものから、拓本、実測を行い、トレース・版組作業を行った。実測終了後、遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進めて編集作業に着手した。

1月下旬に印刷業者を選定し、入稿した。校正作業を経て、平成19年3月に報告書を刊行した。本報告書で取り扱った、図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。



第1図 調査区的位置

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

平成9年度（発掘調査）

理事長	荒井 桂	調査部	
常務理事兼管理部長	稲葉 文夫	理事兼調査部長	梅沢 太久夫
管理部		調査部副部長	今泉 泰之
専門調査員兼経理課長	関野 栄一	調査第二課長	杉崎 茂樹
庶務課長	依田 透	主任調査員	新屋 雅明
		主任調査員	上野 真由美

平成11年度（発掘調査）

理事長	荒井 桂	調査部	
常務理事兼管理部長	広木 卓	調査部長	増田 逸朗
管理部		調査部副部長	水村 孝行
管理部副部長兼経理課長	関野 栄一	専門調査員（調査第二担当）	坂野 和信
庶務課長	金子 隆	統括調査員	田中正 夫
		主任調査員	大谷 敬

平成15年度（発掘調査）

理事長	桐川 卓雄	調査部	
常務理事兼管理部長	中村 英樹	調査部長	宮崎 朝雄
管理部		調査部副部長	坂野 和信
管理部副部長	村田 健二	主席調査員（調査第二担当）	劍持 和夫
主 席	田中 由夫	統括調査員	伴瀬 宗一
		調査員	池田 恵美子

平成18年度（整理報告書刊行）

理事長	福田 陽充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本 洋一	調査部長	今泉 泰之
総務部		調査部副部長兼資料活用部副部長	小野 美代子
総務部副部長	昼間 孝志	整理第二課長	富田 和夫
総務課長	高橋 義和	主 事	菊地 真

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

西浦遺跡、野本氏館跡、山王裏遺跡、銭塚遺跡はいずれも東松山市内の遺跡であり、東武東上線東松山駅から南東約1.5～2kmに位置する。

東松山市は埼玉県の中央部に位置し、市域の大半は丘陵や台地からなる。今回報告する4遺跡は、市内を流れる都幾川の流域にある。西浦遺跡、野本氏館跡、山王裏遺跡は都幾川北岸の台地上に立地する遺跡で、東松山市大字上野本、および下野本に所在する。銭塚遺跡は都幾川南岸の低地上に立地する遺跡で、東松山市大字高坂字銭塚に所在する。

埼玉県の地形は西の秩父山地、東の埼玉平野に大きく二分される。平野の西縁には山地沿いに丘陵・台地が取り付いており、櫛挽台地の一部を除き、荒川水系の河川によって形成されている(第2図)。

埼玉県中央部には半島状に突き出す2つの丘陵があり、北側を比企丘陵、南側を岩殿丘陵と呼ぶ。丘陵は市野川、都幾川、越辺川による開折が進み、谷が発達している。比企丘陵の東端は独立した残丘となり、吉見丘陵とも呼ばれている。この丘陵の間にあって、市野川と都幾川に挟まれる台地を東松山台

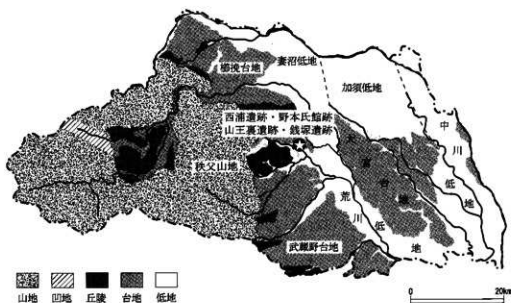
地と呼び、都幾川と越辺川に挟まれた小さな台地を高坂台地と呼ぶ(第3図)。

東松山台地は武蔵嵐山の菅生から東松山市根岸まで、東西に細長く伸びる台地である。現在の東松山市街で標高約40m、根岸で約20mを測る。約10～8万年前に形成された武蔵野面(M2面、ステージ4)に対比され、都幾川などによる扇状地性の地形である。北の江南台地などはより早く、約12万年前に形成された(M1面)。

台地上は北側から谷の開折が進むものの、全体としては平坦である。市野川、都幾川の両河川沿いには、断続的に一段低い面が分布する。これは河岸段丘であり、約5万年前の立川期(ステージ3)以降に形成されたと考えられる。

高坂台地は東武線の高坂駅が位置する台地で、岩殿丘陵の東側に続く小規模な台地である。東松山台地と同様、扇状地性の台地で、河川の浸食をまぬがれて三角形に残されている。台地上は平坦であまり開折されていない。

都幾川は東松山市内を流れる代表的な河川の一つ



第2図 埼玉県の地形

であり、湍川、市野川と比べ、下流に広い沖積低地を形成している。都幾川は高坂台地の東側で大きく南へと流れを変え、落合橋で越辺川と合流する。坂戸市と川島町との境界でもある。堤外は現在の沓瀬原で旧河道などが認められる。堤内の沖積低地には、集落がのる自然堤防が細長くのびている。

山王裏遺跡は台地上の標高30m程度の平坦面に立地する。西浦遺跡、野本氏館跡は、より都幾川に近い位置にあり、標高20m程度の段丘面に立地している。台地と段丘の比高差は5～6m程度である。銭塚遺跡は、堤防に接する低地上にあり、かつては微高地であったものと推測される。

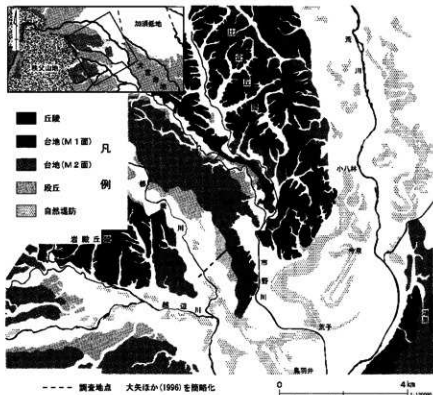
2. 歴史的環境

ここでは遺跡の位置する東松山台地と、その周辺の歴史的環境について概観する(第4図)。

遺跡は縄文時代から多数認められ、東形遺跡(50)や代正寺遺跡(49)で前期、大行山遺跡(16)、岩の上遺跡(22)や月並遺跡(42)で中期の住居跡が検出されている。後期は雉子山遺跡(23)だけであり、全体として縄文時代の遺跡は現状では少ない。

弥生時代には遺跡はその数を増す。附川遺跡(24)、古凍根岸裏遺跡(37)、東形遺跡は土器のみが確認される。東松山台地では天神原遺跡(38)で住居跡1軒、雉子山遺跡(23)で2軒が検出されている。大行山遺跡(16)は吉見丘陵に位置する遺跡で、住居跡12軒と方形周溝墓1基が発掘された。西浦遺跡では中期末から後期の住居跡と方形周溝墓が検出されている(北島シンゴ準備委員会2003)。

都幾川を挟んで対岸の高坂台地では、代正寺遺跡が該期の大規模な集落として知られる。住居跡、方形周溝墓が多数見つかっており、集落は後期まで継



第3図 東松山周辺の地形

続していた。隣接する大西遺跡(52)は後期を主体とするが、中期の住居跡も1軒確認されている。附島遺跡(61)も中期および後期の集落である。坂戸の台地際では近年、木曾免遺跡(69)で中期の環濠集落が発見された(黒坂・宅間2007)。

後期の集落は、久米田遺跡(17)、下道添遺跡(35)、下山遺跡(36)、古凍根岸裏遺跡、駒堀遺跡(60)などがある。高坂台地の杉の木遺跡(53)では住居跡10軒が検出され、吉ヶ谷式の土器が多くなっている。高坂参番町遺跡(47)も同様に、住居跡が十数軒発見されたという。また岩鼻遺跡(9)は、いわゆる岩鼻式の標識遺跡として知られる。

弥生時代で近年注目されるのは、都幾川低地である。最近の調査によって、銭塚遺跡(第2次)から梅搦文系土器を用いた土器棺墓、反町遺跡(6)からは弥生中期後半から古墳時代初頭にかけての集落や墓域が発見されている。銭塚(4)、城敷(5)、反町遺跡の3遺跡は、総じて古墳時代、奈良・平安時



- 1 山王直遺跡 2 野本氏館跡 3 西浦遺跡 4 饒羅遺跡 5 城敷遺跡 6 反町遺跡 7 中原遺跡 8 八幡遺跡
 9 岩鼻遺跡 10 観音寺遺跡 11 上松本遺跡 12 吉見百穴横穴墓群 13 松山城跡 14 和名埴輪窯跡群 15 かぶと塚
 古墳 16 大行山遺跡 17 久米田遺跡 18 久米田古墳群 19 山の根古墳 20 西吉見糸里遺跡 21 三ノ跡地遺跡 22
 岩の上遺跡 23 雉子山遺跡 24 附川遺跡 25 竈田遺跡 26 五領遺跡 27 柏崎17号墳 28 権現塚古墳 29 天神山古墳
 30 香清水遺跡 31 おくま山古墳 32 上川入遺跡 33 野本将軍塚古墳 34 古吉海遺跡 35 下込路遺跡 36 下山遺
 跡 37 古渡横岸裏遺跡 38 天神原遺跡 39 根岸稲荷神社古墳 40 正直稲荷塚遺跡 41 正直玉作遺跡 42 月並遺跡
 43 高坂一番町遺跡 44 大門遺跡 45 高坂氏館跡 46 高坂式番町遺跡 47 高坂番番町遺跡 48 下寺前遺跡 49 代正
 寺遺跡 50 東形遺跡 51 小代氏館跡 52 大西遺跡 53 杉の木遺跡 54 舞台遺跡 55 大家原遺跡 56 松山強跡群
 57 田山遺跡 58 緑山遺跡 59 立野遺跡 60 駒池遺跡 61 附島遺跡 62 草池遺跡 63 勝呂遺跡 64 松遺跡 65
 岡山古墳 66 勇福寺遺跡 67 相模場遺跡 68 雷電塚古墳 69 木曾免遺跡 A 岩鼻古墳群 B 青島古墳群 C 附
 川古墳群 D 柏崎古墳群 E 野本古墳群 F 古渡古墳群 G 諏訪山古墳群 H 高坂古墳群 I 松山古墳群 J 毛
 塚古墳群 K 新町古墳群 L 雷電塚古墳

第4図 周辺の遺跡

代まで集落が認められる。今後は居住域としての低地のあり方に注意する必要がある。

古墳時代の東松山も、前代と同様に多数の遺跡が残されている。東松山台地では、五領遺跡(26)が前期の集落として著名であり、五領式のもととなった。ほかに番清水遺跡(30)、古吉海道遺跡(34)がある。高坂台地では代正寺遺跡、大西遺跡が前期～中期の集落であり、下寺前遺跡(47)は前期～後期の集落である。これらの遺跡の多くは、奈良・平安時代においても継続して営まれている。

東松山には古墳も多く認められる。東松山台地では青島古墳群、附川古墳群、柏崎古墳群、野本古墳群や、古凍古墳群がある。柏崎古墳群中に位置する天神山古墳(29)は前期の前方後方墳である。権現塚古墳(28)、おくま山古墳(31)はFA火山灰の検出から5世紀末頃と見られる。柏崎古墳群は5世紀後葉から末頃に形成され、7世紀中葉まで存続した(江原・大谷2005)。

古凍古墳群は、前期築造の前方後方墳である根岸稲荷神社古墳(39)など14基が現存する。前期の方形周溝墓、5世紀末頃の円墳などが検出されており、7世紀まで存続したと見られる。

野本古墳群は、前方後円墳の野本將軍塚古墳(33)を擁する。野本將軍塚古墳は段丘縁辺に、都幾川に前方部を向けて築かれる。築造年代こそ定かでないが、全長115mと、県内第2位の大きさを誇る。

村岸では低地の反町遺跡で前方後円墳を含む古墳群が発見された。台地上には高坂古墳群、桜山古墳群、毛塚古墳群、そして諏訪山古墳群がある。諏訪山古墳群は53基からなり、4世紀前半の前方後円墳である諏訪山29号墳があるほか、5世紀後半から7世紀前半まで存続する群集墳である。

奈良・平安時代の遺跡の調査事例は、代正寺遺跡や大西遺跡など比較的限られる。中原遺跡(7)は7世紀末から8世紀の集落であり、住居跡が検出されている。山王裏遺跡は8世紀前半から9世紀後半の遺跡である。遺跡西側で基壇状遺構と、隣接する

竪穴状遺構を検出した。基壇は方形で、周囲に区画溝が巡っている。竪穴状遺構からは瓦が出土しており、寺院関連遺構と見られている。

上川入遺跡(32)、西浦遺跡では8世紀前半から9世紀後半の住居跡が多数確認されている。西浦遺跡の南側では掘立柱建物跡が複数あることが想定されている。この調査区からは円面硯、刻印・黒書・朱書された須恵器などが出土している。

古代において、上野国から南下して武蔵国府へと至るルートを東山道武蔵道と呼ぶ。道路は直線的に設けられ、東松山市内を通過すると考えられてきた。最近、従来の想定位置からやや東にそれた西吉見条里遺跡で、幅約12mの古代道路跡が発見された(古代交通研究会2004)。比企郡衝の位置は現在なお定まっていないが、古代道路の存在や、山王裏遺跡の寺院跡、西浦遺跡の遺物から考えて、野本から古凍の一带に比企郡衝に関わる施設があったものと推測される(鳥羽・大谷2002)。

中世の比企は鎌倉街道上道が通過し、古代に続き交通の要衝であった。野本氏館跡はかつての無量寿寺の境内で、鎌倉幕府御家人の野本氏の館跡とされる。野本將軍塚古墳の後円部頂には利仁神社経塚が位置する。これは明治時代に利仁神社造営の整地にもなっており発見されたもので、経筒6個などが納められていた。銘文から12世紀のものと分かる(水口2007)。西浦遺跡でも中世の遺物が多く出土している。

高坂台地の正代周辺は児玉党の小代氏の本拠地、高坂一帯は秩父氏の一族である高坂氏の本拠地と考えられ、小代氏館跡(51)、高坂氏館跡(45)はその館跡とされる。吉見丘陵には天然の要害を利用して松山城跡(13)が築かれた。扇谷上杉氏の重臣であった城主の上田氏は後に後北条氏方へ寝返り、比企地域への後北条氏支配の伸長に大きな役割を果たしたと言える(栗岡2005)。

このように近世に至るまで、東松山台地の周辺は比企地域、そして埼玉において歴史的に重要な位置を占めていた。

III 西浦遺跡

1. 概要

西浦遺跡は、東松山市野本小学校の西側一帯に広がる遺跡である。今回の発掘調査は、一般国道407号東松山バイパスの道路改築工事にともなう事前調査として実施された。西浦遺跡では、同じ道路改築工事にともなう発掘調査が過去、4次にわたって実施され、報告書が刊行されている（山本・西井1997）。

発掘調査は、野本氏館跡（第2次）の調査と同時に実施された。西浦遺跡における、今回（第5次調査）の調査範囲は、現在のJA埼玉中央野本支店の南西、一辺約17mの三角形の範囲であり、調査面積は200㎡である。

表土除去を行ったところ、表土から遺構確認面とした地山の関東ローム層まではごく浅く、土層の堆積は少なかった。基本層序は比較的残りの良い、隣接する野本氏館跡で確認した（第四章参照）。

調査地点の標高は22m前後で、現地表面から約15cmは現代の擾乱が、その下に暗褐色土層が深さ25cm程で広がる。暗褐色土層はローム粒子を多量に含む特徴から、近年までの耕作土と考えられる。これらの土を除去すると、地山の関東ローム層が露出する。ローム層の標高は21.0～21.5mを測り、北から南へ

2. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第47号住居跡（第6図）

第47号住居跡はBZ-10・11、CA-10グリッドにかけて位置している。確認面の標高は約21.3mである。

第47号住居跡は、北西の隅を第48号住居跡によって壊される。また北東壁を植栽によって壊される。第47号住居跡の南東側は調査区外に続いており、住居跡の全体は調査できなかった。

第47号住居跡の平面形は隅丸方形である。主軸方向はN-58°-Eをとる。規模は、確認された範囲で

ごく緩やかに傾斜を有する。

西浦遺跡では以前の調査で住居跡46軒、土坑321基、井戸10基、溝63条、竪穴状遺構5基、火葬墓1基、方形周溝墓3基、孤立柱建物跡2棟、地下式坑1基、ピット2基が検出されている。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑1基であった。出土遺物は弥生土器、平安時代の土師器・須恵器からなり、総量はコンテナ3箱である。遺物の時期は、縄文時代、弥生時代、平安時代である。縄文時代は遺構にともなわず、数点が調査区内から出土している。

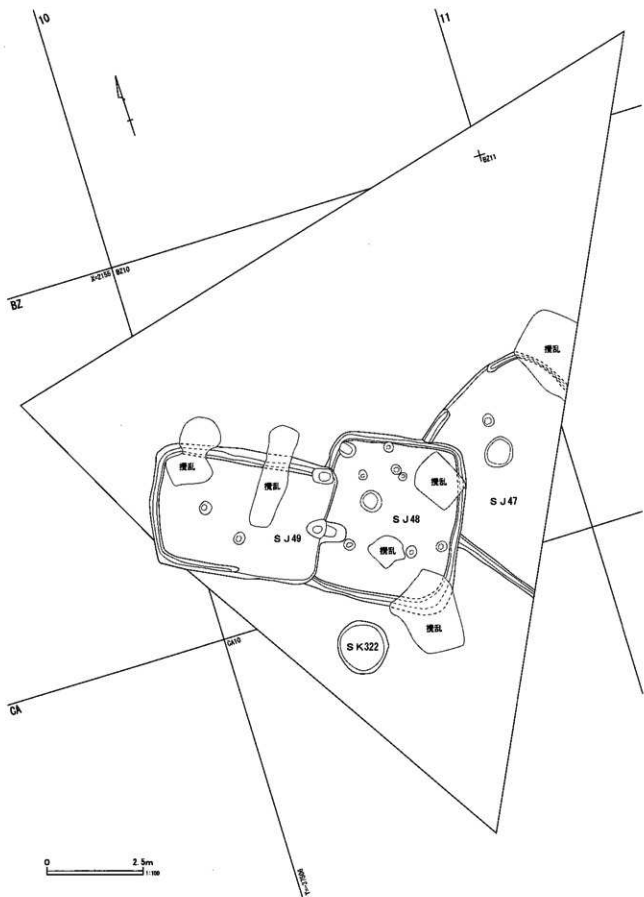
検出された遺構のうち、住居跡は弥生～古墳時代2軒、平安時代1軒である。第47号住居跡、第48号住居跡は弥生～古墳時代の遺構である。部分的に擾乱されるものの、全体に残りは良好であり、特に第48号住居跡からは数多くの土器が検出された。土器は壺、甕のほか、高坏が多い。時期的には弥生時代末～古墳時代初頭にあたるものと考えられる。

第49号住居跡は平安時代の遺構である。カマドがあり、緑釉陶器1点を検出した。ほかに土坑が1基あるが、出土遺物がないため時期は不明である。

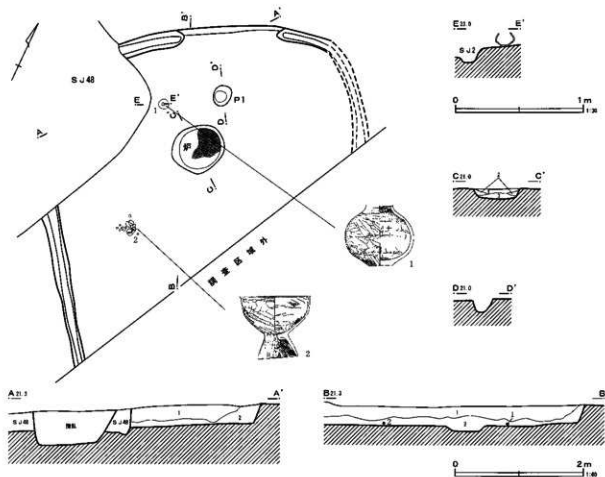
北西～南東方向の長軸が約5.0m、南西～北東方向の短軸が4.8m、深さは0.3mを測る。覆土は主にローム粒子を含む暗褐色土からなる。

周溝は幅0.24m、深さは0.04～0.07mを測る。周溝は北西壁の一部分を除いて確認され、住居跡内をほぼ全周するものと見られる。

炉の主軸方向はN-46°-Eをとる。規模は長軸0.86m、短軸0.72m、深さ0.15mを測る。1層には焼土を多く含み、下層は硬く締まっていた。ピットは炉のすぐ北側で、1基確認された。直径0.32m、深さ0.19mを測る。他にピットは検出されておらず、



第 5 图 西浦遺跡全体图



SJ17
 1 暗褐色土・ローム粒子・焼土粒子少量
 2 黒褐色土・焼土粒子含む・ローム粒子を1よりやや多く含む

SJ47 跡
 1 暗褐色土・ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・焼七ブロック多量
 灰化物少量
 2 褐色土
 ローム粒子・ロームブロック多量 焼土粒子少量 砂まじる
 硬く締まる
 3 褐色土
 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・焼土ブロック多量
 砂利混じる 硬く締まる

第6図 第47号住居跡

主柱穴等は不明である。

遺物は覆土中から少量出土したほか、床面から2点の土器が検出された。1点は頸部より上を欠く壺であり、もう1点は、ほぼ完形の高環である。

出土遺物は、15点を図示した(第7図)。

第7図1は壺である。表面はかなり摩滅している。肩部に縄文が施されるのが肉眼でかろうじて確認された。おそらく文様帯を構成するものと考えられるが、ごく部分的であり、図示し得なかった。比較的小型の壺である。

2は高環である。表面は1と同様に摩滅している。3~15はいずれも破片である。3は壺の口縁、4~8は壺の胴部の破片である。4~7は肩部とみられ、

4は文様帯下に赤彩が残っている。8は格子目文を施す。

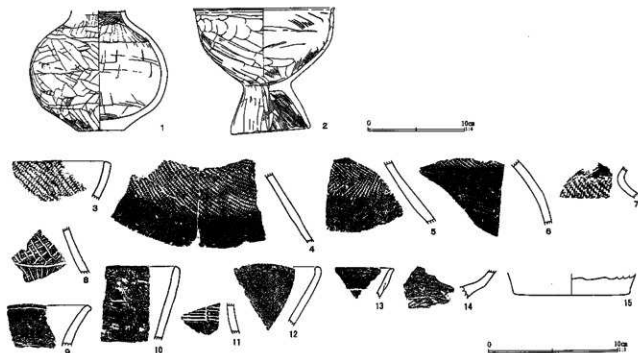
9~11は甕である。11は籐状文が認められる。12~14は高環の破片である。14は高環の環の下部である。

住居の時期は弥生時代末~古墳時代初頭と考えられる。

第48号住居跡(第8・9図)

第48号住居跡はBZ・CA-10グリッドに位置している。確認面の標高は約21mである。

第48号住居跡は第47号住居跡を壊し、第49号住居跡によって西壁を壊される。住居跡の南隅をはじめ



第7図 第47号住居跡出土遺物

第1表 第47号住居跡出土遺物観察表(第7図)

押図番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
7 1	弥生土器	壺		12.5	4.6	砂	良好	灰白	90	器面摩滅 胴部文様帯(縄文残る) 外面刷毛後ナデ 内面ナデ
7 2	弥生土器	高坏	14.5	13.1	8.0	片 英 赤粒 白粒	普通	にふい橙	80	器面摩滅 内外面刷毛およびナデ
7 3	弥生土器	壺		[3.2]		白粒 英	普通	橙	5	素口縁 口縁に縄文
7 4	弥生土器	壺		[5.0]		英 角 雲	良好	橙	5	外面文様帯下を赤彩
7 5	弥生土器	壺		[4.7]		砂	普通	にふい褐	5	羽状縄文 文様帯下に刷毛目残る 刷毛後ナデか
7 6	弥生土器	壺		[5.0]		英 雲	普通	にふい黄橙	5	文様帯下を磨き
7 7	弥生土器	壺		[2.5]			普通	にふい褐	5	胴部文様帯
7 8	弥生土器	蓋		[4.0]		黒粒	普通	にふい橙	5	斜格子文
7 9	弥生土器	甕		[3.2]		礫 英	普通	にふい橙	5	
7 10	弥生土器	甕		[5.8]		角	普通	黄褐	5	無文
7 11	弥生土器	甕		[2.3]			普通	橙	5	縷状文
7 12	弥生土器	高坏		[4.5]		赤粒 英 角	普通	橙	5	外面赤彩
7 13	弥生土器	高坏		[2.4]		英 雲	普通	橙	5	折返し口縁
7 14	弥生土器	高坏		[2.3]		礫 黒粒 白粒	良好	赤褐	5	外面磨き 内面刷毛多
7 15	弥生土器	底部		[1.7]	(9.0)	砂 英 赤粒 雲	普通	橙	5	

3ヶ所が擾乱されるが、全体として残りは良好であった。

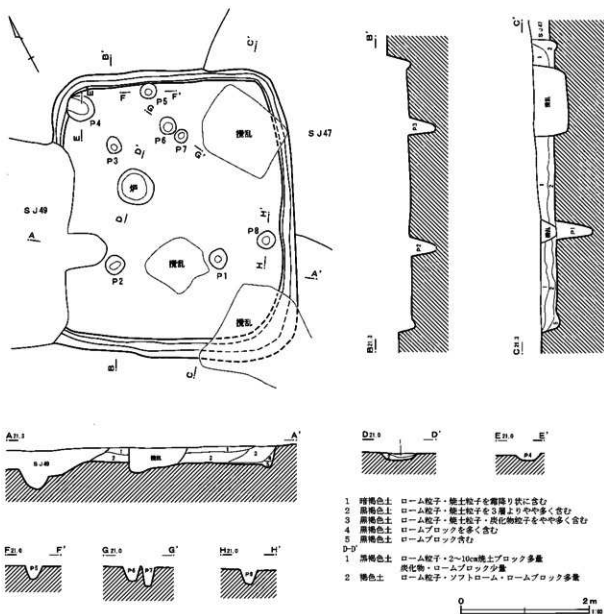
住居跡の平面形は方形である。主軸方向はN-30°-Eをとる。規模は南北が4.4m、東西が3.66m、深さ0.3mを測る。周溝は住居跡を全周するとみられ、幅0.24m、深さ0.02-0.07mを測る。

炉は住居跡の中央やや北寄りに構築される。炉の

主軸方向はN-42°-Eをとる。規模は直径0.56m、深さ0.11mである。

ピットは計8基が検出された。主柱穴はピット1-3の3基と考えられる。住居跡北東の擾乱によってもう1本が壊されたものと考えれば、4本柱の主柱穴が想定される。

ピット1-3はほぼ等間隔に方形に配置され、柱



第8図 第48号住居跡

穴を結んだ線の内側、北西寄りに炉が位置している。

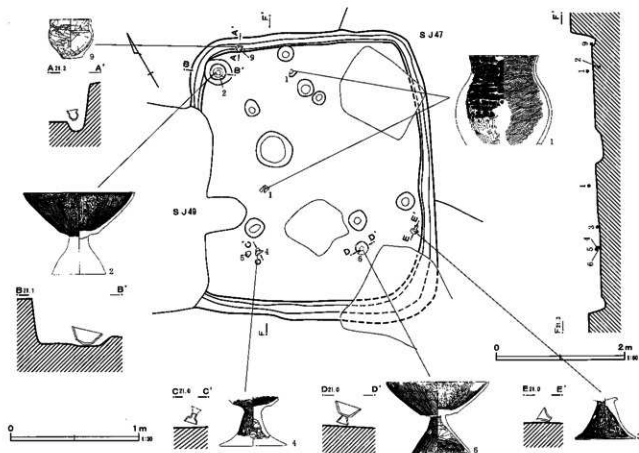
規模はビット1が直径0.3m、深さ0.56m、ビット3が直径0.26m、深さ0.42mを測る。ビット2は直径0.28m、深さは木の根により底面が壊され確認できなかったが、ビット1、ビット3とはほぼ同規模と思われる。

その他に、5基のビットが検出されている。ビット4は住居跡北のコーナーに位置し、最も径が大きい。直径0.42m、深さ0.1mを測る。ビット5は直径0.26m、深さ0.2mを、ビット6は直径0.28m、深さ0.22mを、ビット7は直径0.2m、深さ0.3mを、ピッ

ト8は直径0.26m、深さ0.23mをそれぞれ測る。

遺物は覆土中から多く出土し、床面からも復元可能な個体が多く検出された(第9図)。遺物は住居の北壁寄りと、南壁寄りからそれぞれ出土した。北東壁の周溝直上から小型の鉢が検出された。ビット4の底面からは、高環の環部が検出された。脚部は発見されなかった。ビット1の南側で完形の高環が検出され、周囲にも高環が散在する。

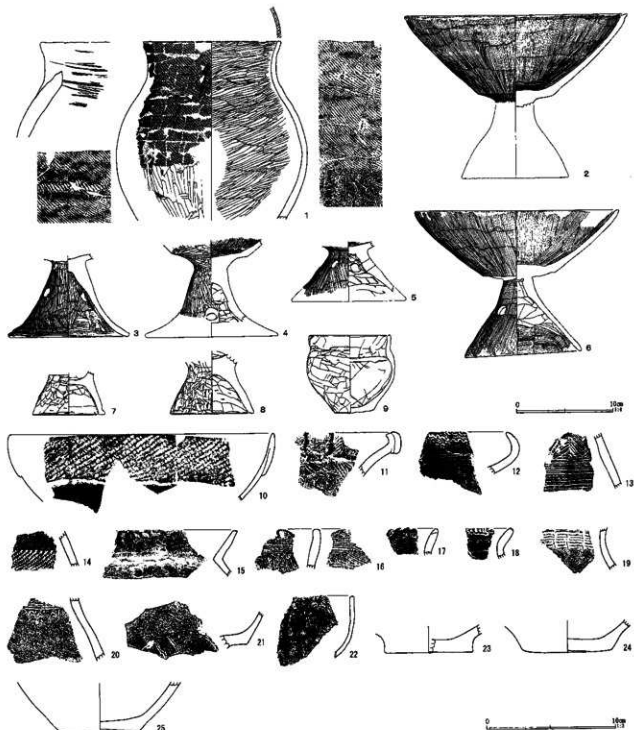
出土遺物は、25点を図示した(第10図)。第10図1は甕である。吉ヶ谷式の甕であり、胴部は丸味を帯びて球状に近く、腰部に若干の櫛溝を施す点が特徴



第 9 図 第 48号住居跡遺物出土状況

第 2 表 第 48号住居跡出土遺物観察表(第10図)

神位番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
10 1	弥生土器	甕	13.8	18.6		角 赤粒 白粒	良好	にぶい赤褐	60	複合口縁状 櫛歯波状文 胴部球形 縄文地に
10 2	弥生土器	高坏	23.0	9.7		片 英 白粒 黒粒	良好	赤褐	60	坏部のみ残寸
10 3	弥生土器	高坏		8.4	12.4	片 英 白粒	良好	赤	60	脚部 4孔
10 4	弥生土器	高坏		[9.1]		片 長 英 白粒	良好	にぶい黄褐	60	脚部 3孔二段か
10 5	弥生土器	高坏		[6.0]		片 英 白粒 黒粒	良好	橙	55	脚部 4孔
10 6	弥生土器	高坏	20.9	15.4	12.2	片 英 白粒 黒粒	良好	にぶい橙	95	3孔
10 7	弥生土器	甕		4.5	7.3	片 角 英 白粒 礫	良好	にぶい赤褐	80	台付甕脚部
10 8	弥生土器	甕		6.1	8.6	片 英 白粒	良好	にぶい橙	80	台付甕脚部
10 9	弥生土器	鉢	8.4	8.1	4.2	角 長 赤粒 白粒	良好	明赤褐	70	
10 10	弥生土器	壺	(20.4)	[5.2]		雲 英 角	良好	にぶい橙	5	折返し口縁 内外面磨き 内面赤彩
10 11	弥生土器	壺		[3.4]		白粒 角	普通	明褐	5	折返し口縁 貼付文
10 12	弥生土器	壺		[3.3]		赤粒	良好	にぶい橙	5	口縁櫛歯文 体部磨き 内外面赤彩
10 13	弥生土器	壺		[4.5]		礫 砂 白粒	普通	橙	5	櫛歯文
10 14	弥生土器	壺		[2.6]		英 黒粒	普通	にぶい橙	5	文様帯上を赤彩
10 15	弥生土器	壺		[3.6]		英 白粒 礫	普通	明赤褐	5	
10 16	弥生土器	甕		[3.1]		砂 英 白粒	普通	明赤褐	5	内外面刷毛目
10 17	弥生土器	壺		[2.0]		赤粒	普通	橙	5	口唇刻目 内面赤彩
10 18	弥生土器	壺		[2.4]		礫	普通	褐	5	口唇刻目
10 19	弥生土器	甕		[3.4]		白粒	普通	にぶい橙	5	糜状文 体部刷毛
20 弥生土器	甕			[5.0]		砂 赤粒	普通	にぶい橙	5	糜状文 櫛歯波状文 体部刷毛
10 21	弥生土器	高坏		[2.6]		砂 白粒	普通	にぶい橙	5	内外面磨き
10 22	弥生土器	ミニチュア		[4.8]		英 雲	普通	にぶい褐	5	ミニチュア土器か
10 23	弥生土器	底部		[2.1]	(6.8)	白粒 雲	普通	橙	5	壺底部
10 24	弥生土器	底部		[2.4]	(6.8)	砂	普通	明褐	5	
10 25	弥生土器	底部		[3.8]	(6.0)	砂 赤粒	普通	にぶい橙	5	



第10図 第48号住居跡出土遺物

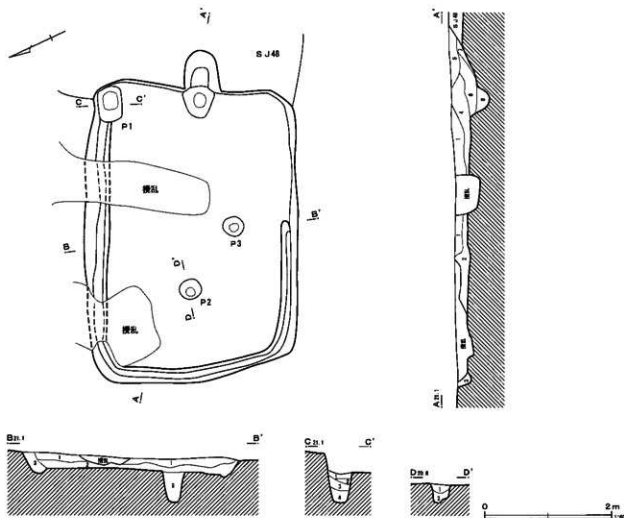
である。

2～6は高環である。2は環部のみを残す。4は2段づつ3孔を施すものと見られる。6はほぼ完形である。7～8は台付甕の脚部である。9は小型の鉢である。

10～14、17は壺である。10・11は折り返し口縁の

壺である。12は袋状の口縁を呈するか。15～16、18～20は甕である。15は口縁が強く外側に屈曲する。他は刻目等を施す。20は梅播波状文が認められる。

21は高環の環の下部であり、明瞭な稜を持つ。22は非常に薄手に作られており、ミニチュア土器の可能性はある。



- Fig. 1
- 1 暗褐色土 焼土・ロームの細粒を含む
 - 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子含む 炭十粒子をわずかに含む
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量 粘土粒子含む
 - 5 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量
 - 6 黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量 (4・5層より多) ローム粒子含む (カマド)
 - 7 暗褐色土 焼土粒子少量 ローム粒子多量 (カマド)
 - 8 暗褐色土 焼土粒子をわずかに含む ロームブロック多量 (カマド周り)
 - 9 暗褐色土 ロームブロック少量

- Fig. 2
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量

第11図 第49号住居跡

住居の時期は弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる。

3. 平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

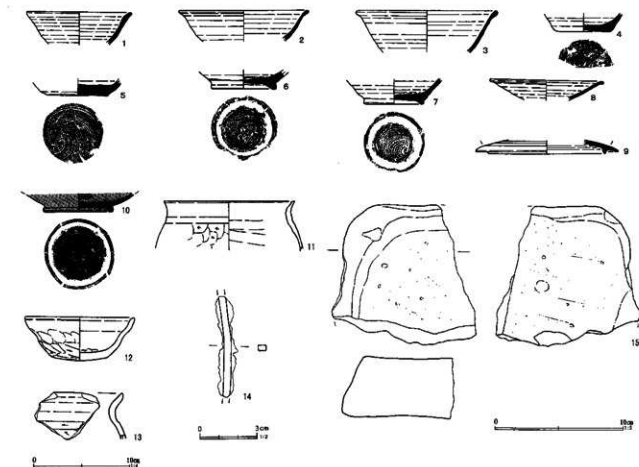
第49号住居跡 (第11図)

第49号住居跡はBZ-9・10グリッドに位置している。確認面の標高は約21mである。第49号住居跡は擾乱により、住居跡の北壁が部分的に壊される。その他の部分の残りは良好であった。

住居跡の平面形は長方形である。主軸方向はN-65°-Wをとる。規模は東西の長軸が5.12m、南北の短軸が3.28mで、深さは0.27mを測る。

周溝は住居跡の北東隅から北壁、西壁に沿って掘り込まれ、南壁の途中で立ち上がる。規模は幅0.26m、深さは0.05～0.09mを測る。

カマドは東壁の中央に付設される。主軸方向はN-66°-Wをとる。規模は長さ1.06m、焚口幅0.54m、深さ0.3mを測る。カマドの軸は確認されなかった。カマド内の覆土は焼土を多量に含んでいる。



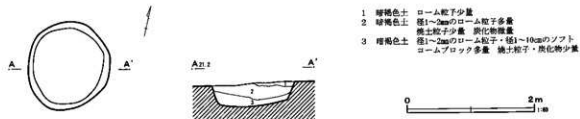
第12図 第49号住居跡出土遺物

第3表 第49号住居跡出土遺物観察表(第12図)

標識番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
12 1	須恵器	環	(10.8)	[3.4]	針		普通	灰	5	南比企産
12 2	須恵器	環	(13.5)	[3.2]	針		不良	にょい橙	10	南比企産 酸化還元か 内面黒色 付着物
12 3	須恵器	環	(14.4)	[4.4]	片角英		普通	灰	5	
12 4	須恵器	環		[1.9]	(5.6)	英	不良	褐灰	10	酸化還元か
12 5	須恵器	環		[1.8]	6.2	針	普通	灰	20	南比企産
12 6	須恵器	高台付埴		[2.0]	(6.7)		普通	灰	20	
12 7	須恵器	高台付埴		[2.7]	6.0	英	不良	黄褐	20	
12 8	須恵器	皿	(11.7)	[2.1]	針		普通	灰	5	南比企産
12 9	須恵器	蓋	(12.0)	[1.4]	白較英		普通	灰	5	
12 10	緑釉陶器	段皿		[2.1]	7.3		普通	オリーブ黄	20	美濃産 発色黒ずむ 角高台 内面磨き
12 11	土師器	小型甕	(13.6)	[5.2]	角針		普通	にょい黄橙	5	
12 12	土師器	環	(11.2)	4.6	角針		普通	橙	50	
12 13	土師器	甕		[4.8]	角針		普通	にょい黄橙	5	
12 14	鉄製品	不明	長さ[5.2]	幅0.4	厚さ0.3	重量4.4			10	棒状製品(部分) 線状に伸びる 断面角形 直線状に伸びる
12 15	石器	台石	長さ[11.2]	幅[11.1]	厚さ4.7	重量979.6			25	安山岩

ビットは3基検出された。ビット1は住居跡の北東隅に位置し、平面形は方形である。規模は直径0.

54m、深さ0.47mを測る。ビット2、ビット3は、住居跡中央付近に位置する。規模は、ビット2が直



第13図 第322号土坑

径0.34m、深さ0.29m、ピット3が直径0.13m、深さ0.47mを測る。これらのピットの配置は不規則であり、性格は不明である。

遺物は覆土中から少量出土した。弥生～古墳時代の土器を多く含み、第49号住居跡のものと考えられる遺物は少なかった。

出土遺物は15点を図示した(第12図)。ほとんどが破片であり、器形全体が分かる資料は少ない。第12図1～5は須恵器の坏である。6～9も須恵器で高台付城や、皿、蓋である。

10は緑釉陶器の段皿である。内面に磨きが認められる。発色は黒ずんでいる。美濃産である。

11、13は土師器の甕、12はピット1から出土した遺物で、土師器の坏である。

14は棒状の鉄製品で器種は不明である。15は台石である。

住居の時期は平安時代と考えられる。

4. その他の遺構と遺物

調査区内から住居跡の他に、土坑1基が検出された。他に遺構は検出されなかった。

(1) 土坑

第322号土坑(第13図)

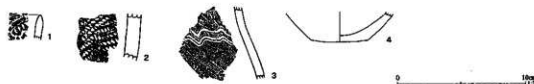
CA-10グリッドに位置している。平面形はほぼ円形である。主軸方向はN-6°-Wをとる。規模は長軸1.4m、短軸1.28m、深さ0.37mを測る。

土師器の小片が出土したが、時期を特定できる遺物はなく、土坑の時期は不明である。

(2) 遺構外出土遺物(第14図)

遺構外から出土した遺物はほとんど無い。第14図1・2は縄文土器である。1は竹管文を施す口縁部の破片で、罫襷式である。2は縄文を施す胴部破片で、加曾利E式とみられる。

3・4は第49号住居跡から出土した弥生時代の土器である。3は梅縋文を施す胴部破片である。



第14図 遺構外遺物

第4表 遺構外出土遺物観察表(第14図)

検出番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
14 3	弥生土器	甕		[5.9]		硬白粒	普通	にぶい褐	5	梅縋文 体部刷毛
14 4	弥生土器	底部		[2.3]	(4.4)	白粒	普通	褐	5	

IV 野本氏館跡

1. 概要

野本氏館跡は、西浦遺跡の南東部を占める遺跡であり、野本小学校、野本将軍塚古墳などをその範囲内に含む。野本氏館跡では、道路改築工事ともなう発掘調査が過去に実施され、報告書が刊行されている（山本・西井1997）。

発掘調査は、西浦遺跡（第5次）の調査と同時に、一般国道407号東松山バイパスの道路改築工事ともなう事前調査として実施された。野本氏館跡（第2次）における調査範囲は、現在のJA埼玉中央野本支店に隣接する長さ50m程の範囲であり、調査面積は800㎡である。

表土除去を行ったところ、表土から、遺構確認面とした地山の関東ローム層まではごく浅く、土層の堆積は少なかった（第15図）。基本層序を見ると、標高は22.2mで、現地表面から約15cmは現代の攪乱が、その下に暗褐色土層が深さ25cm程で広がる。暗褐色土層はローム粒子を多量に含み、近年までの耕作土と考えられる。

これらの土層の下に地山の関東ローム層がある。ローム層の標高は21.0～21.9mを測り、北から南へ緩やかに傾斜をもつ。ローム層はBUグリッド以南で大きく削平されて20～30cmの段差を持っており、調査区内の本来の標高差は50cm程度に収まるものと考えられる。

野本氏館跡第1次調査では、土坑4基、竪穴状遺

構1基、溝跡22条、堀跡1条が検出されている。

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、溝跡4条、土坑1基である。出土遺物は弥生土器、中世のかわらけ、陶器、石器などからなり、総量はコンテナ5箱である。遺物の時期は、縄文時代、弥生時代、古代、中世、江戸時代である。

検出された遺構の特徴を以下にまとめる。

住居跡は第1号住居跡、第2号住居跡の2軒あり、共に弥生時代である。第1号住居跡は南側を攪乱で大きく削平される。いわゆる焼失住居であり、土器や炭化物が検出された。第2号住居跡も同じく焼失住居である。住居西側の一部を検出し、完形の壺などが出土している。時期はいずれも弥生時代中期後葉にあたるものと考えられる。

溝跡は4条が検出された。第23号溝跡、第24号溝跡、第25号溝跡は、いずれも同一方向に延びており、相互の関連性が指摘されるところである。第22号溝跡は第23号溝跡とほぼ90度向きが異なり、第23号溝跡と第22号溝跡はL字形に垂直に交わり、新旧関係有する。

溝跡の出土遺物は、鎌倉時代のもものと室町時代のもものが認められ、遺構の時期は、中世の中でも二期に分かれることが推測される。

土坑は、出土遺物がないため時期が不明である。ほかに調査区から、石蔵や打製石斧が出土している。

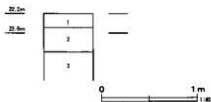
2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第17図）

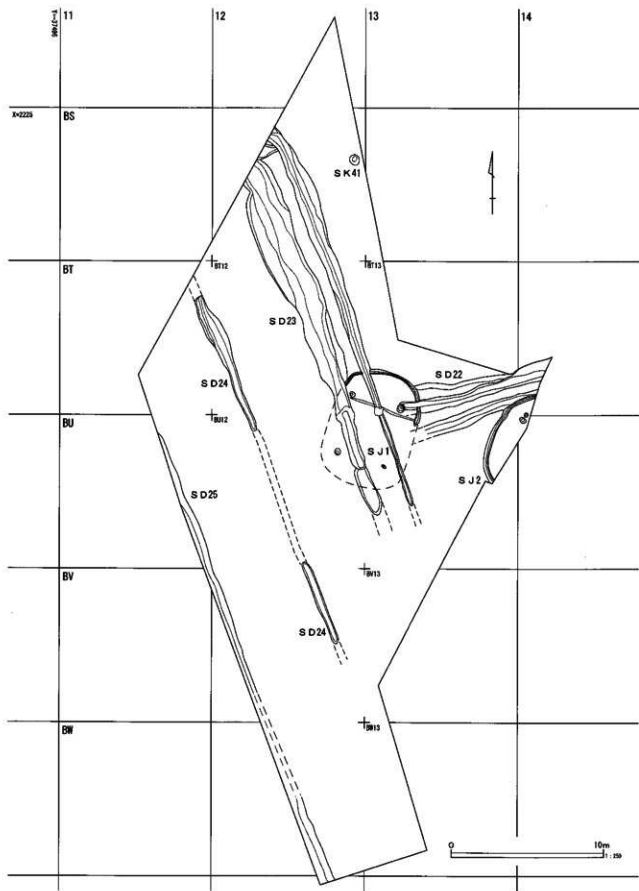
第1号住居跡はBT-12・13、BU-12・13にかけて位置している。確認面の標高は約21.7mである。

BUグリッドラインより南は近年の攪乱によって調査区全体が大きく削平されており、第1号住居跡

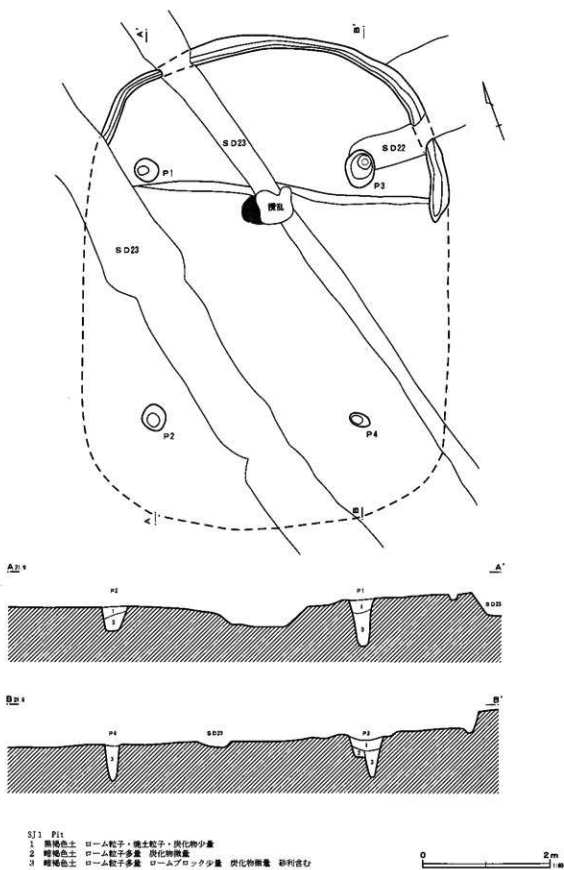


- 1 攪乱（現代）
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量
- 3 地山 関東ローム

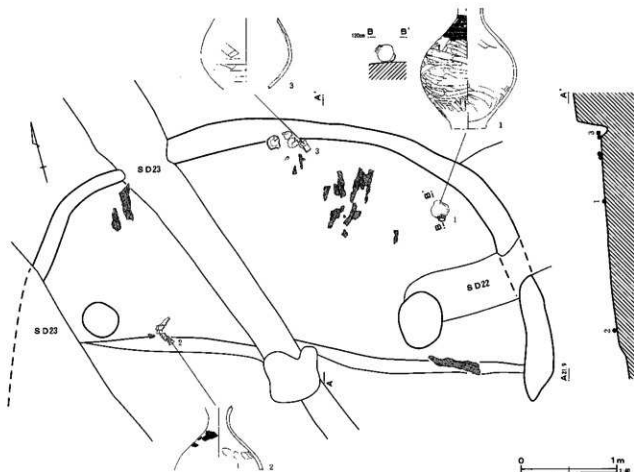
第15図 野本氏館跡基本層序



第16図 野木氏館跡全体図



第17図 第1号住居跡



第18図 第1号住居跡遺物出土状況

の南側三分の二は床面まで壊されていた。また第23号、第22号溝跡によって壊される。

住居跡の平面形は隅丸長方形である。主軸方向はN-14°-Eをとる。規模は南北が確認された範囲で2.28m、東西が5.1m、深さ0.2mである。主柱穴の配置から考えて、第1号住居跡の南北方向の長軸は、本来7.7mほどの規模であったと推測される。

周溝は確認した範囲では全周しており、規模は幅0.2m、深さは0.03~0.07mを測る。炉は確認されなかった。住居跡中央の擾乱に接して焼土が検出されたが、削平を受けた範囲で原位置は保っていない。

ピットは4基検出した。主柱穴と考えられ、長方形に配置される。規模は、ピット1が直径0.38m、深さ0.7mを、ピット2が直径0.42m、深さ0.4mを、ピット3が直径0.58m、深さ0.68mを、ピット4が直径0.34m、深さ0.59mを測る。

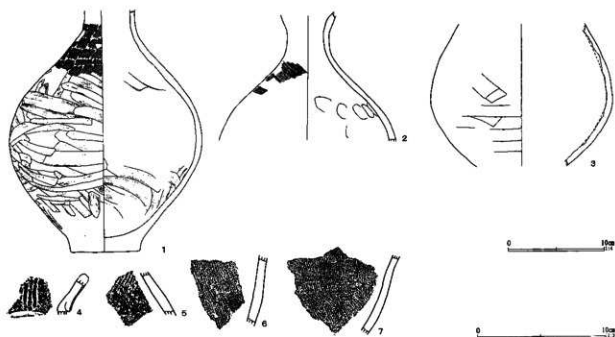
遺構の覆土はほとんど残っておらず、溝の覆土を掘り上げてすぐに遺物が検出された。出土状況から、第1号住居跡は焼失住居と判断される(第18図)。

住居跡の壁沿いの3ヶ所から、炭化した木材が検出された。樹種は不明だが木本であり、垂木や壁材の一部の可能性があろう。遺物はごく少なく、溝跡の覆土中から検出されたものが多い。炭化材の他に、形の分かる土器が3点、発見されている。

出土遺物は7点を図示した(第19図)。第19図1~3は壺である。1は頸部から上を欠く。肩部に縄文を施し、底部付近1ヶ所に黒斑がある。2は口縁と胴下部を欠く。共に頸部の細い壺である。3は胴部の破片で、1・2と同程度の大きさで見られる。

4・5は壺の破片で、4は折返し口縁の一部である。6・7は甕の破片である。

住居の時期は弥生時代中期と考えられる。



第19図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡 (第20・21図)

第2号住居跡はBT-13・14、BU-13・14グリッドに位置している。確認面の標高は約21.8mである。第2号住居跡はその半分以上が調査区外にあり、西側の一部のみを調査した。第2号住居跡は、北端を第22号溝跡に壊される。

住居跡の平面形は不明だが、コーナーが比較的丸みを帯びており、隅丸方形の可能性もある。主軸方向はN-27°-Eをとる。規模は南北が6.44m、東西が確認された範囲で1.72m、深さ0.34mを測る。

周溝は調査範囲内では全周しており、幅0.34m、深さ0.09~0.14mを測る。炉は未検出である。

ピットは2基検出された。ピットは住居跡の北壁寄り、2基並んで発見された。規模はピット1が

直径0.46m、深さ0.63mを、ピット2が直径0.3m、深さ0.7mを測る。

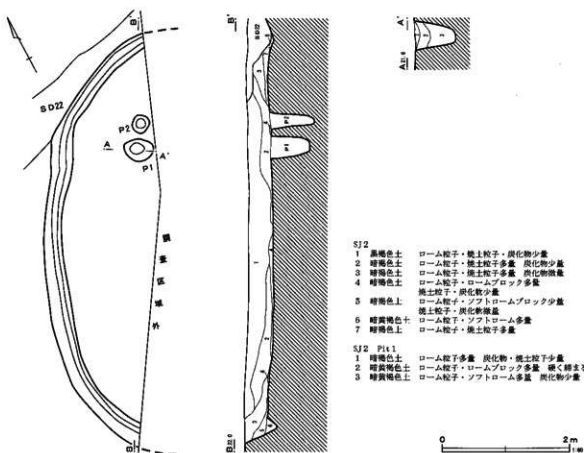
第2号住居跡は、第1号住居跡と同様、焼失住居である(第21図)。炭化した材は、住居跡の南半分から特に多く検出された。炭化材は壁際に位置するものが多く、やや散在している。樹種は不明である。

土器は全体に多く出土した。床面直上から出土した遺物が多いが、図示した中でも明らかに浮いている土器が認められる。器形の復元可能な個体が3点検出された。第21図1は完形の壺で、南西壁に寄りかかった状態で発見された。2も壺で調査区壁から検出された。3は甕で底部を欠いている。口を逆さまにした状態で検出された。

出土遺物は20点を図示した(第22図)。第22図1は

第5表 第1号住居跡出土遺物観察表(第19図)

押図番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
19 1	弥生土器	壺		[25.1]	7.2	砂 長	良好	にぶい赤褐	90	縄文・体部刷毛 底部付近1ヶ所に黒斑
19 2	弥生土器	壺		[14.9]		砂	良好	にぶい褐	15	内面ナデ 外面(肩部)刷毛。(体部)磨き
19 3	弥生土器	壺		[14.7]		砂 白粒 黒粒	普通	明赤褐	15	内面割離・磨耗 外面ナデ
19 4	弥生土器	壺		[2.8]		白粒	普通	にぶい赤褐	5	折返し口縁 貼付文(微隆帯)
19 5	弥生土器	壺		[3.5]		砂 白粒	普通	褐	5	外面磨き 器面磨耗
19 6	弥生土器	甕		[3.5]		白粒	普通	褐	5	体部刷毛
19 7	弥生土器	甕		[6.3]		白粒 黒粒	良好	褐	5	体部刷毛

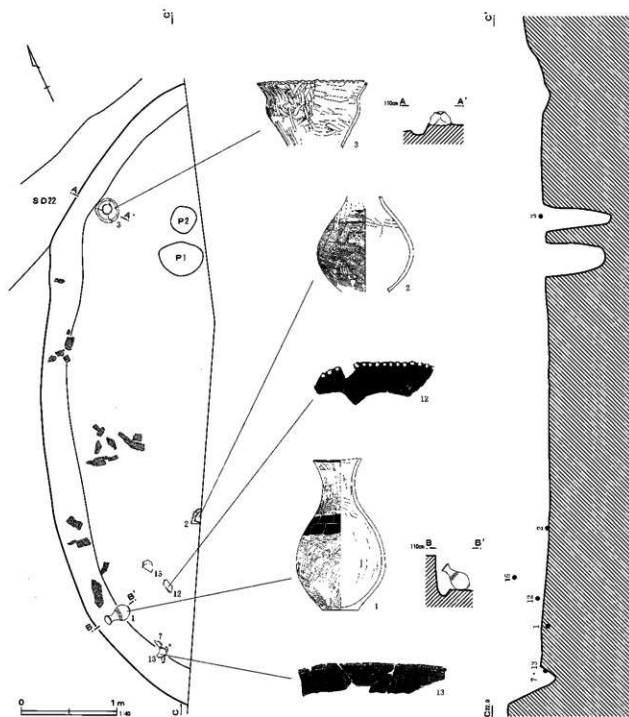


- SJ2
- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量 炭化物微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ソフトロームブロック少量
- 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化物微量
- SJ2 Pit 1
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 硬く締まる
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 炭化物少量

第20図 第2号住居跡

第6表 第2号住居跡出土遺物観察表(第22図)

検出番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存	備考
22 1	弥生土器	壺	10.0	31.7	7.6	砂 長 英	良好	にぶい橙	100	口唇・肩部縄文 外面磨き、墨斑有り
22 2	弥生土器	壺		[20.0]		長 砂 白粒	良好	橙	25	外面黒斑、ナデ後横刷毛 内面剥離多
22 3	弥生土器	甕	23.1	[14.2]		英 砂	良好	灰褐	65	体部口の細かい刷毛
22 4	弥生土器	壺		[5.0]		白粒	普通	明褐	5	備指文 外面磨き
22 5	弥生土器	壺		[2.9]		白粒	普通	明赤褐	5	
22 6	弥生土器	壺		[4.1]		白粒	良好	明褐	5	
22 7	弥生土器	壺		[8.0]		白粒	良好	にぶい褐	5	内外面磨き
22 8	弥生土器	埴		[3.6]		礫 白粒	普通	明赤褐	5	
22 9	弥生土器	甕		[4.8]		白粒	普通	褐	5	
22 10	弥生土器	甕		[3.2]		砂 赤粒	普通	にぶい褐	5	
22 11	弥生土器	甕		[4.0]		砂 白粒	普通	橙	5	
22 12	弥生土器	甕	(24.3)	[6.0]		礫 白粒 黒粒	普通	橙	5	
22 13	弥生土器	甕	(24.6)	[4.3]		白粒 砂 赤粒	良好	にぶい褐	5	外面磨き 口唇部縄文
22 14	弥生土器	甕		[1.7]		白粒 砂	普通	橙	5	備指文
22 15	弥生土器	甕		[12.0]		白粒 砂	普通	赤褐	5	
22 16	弥生土器	高环		[3.5]		礫 白粒	普通	褐	5	口唇部鋸歯文
22 17	弥生土器	高环		[3.5]		赤粒 黒粒	普通	橙	5	口唇部縄文地に鋸歯文 外面赤彩
22 18	弥生土器	高环		[2.8]		白粒	良好	橙	5	内外面磨き、赤彩
22 19	弥生土器			[3.8]			普通	橙	5	P1上面出土 台付甕か
22 20	弥生土器	底部		[2.7]	(9.0)	砂 白粒 英	普通	明赤褐	5	



第21図 第2号住居跡遺物出土状況

肩部、口唇部に縄文を施す。胴部に黒斑が広がる。
2も焼成時と思われる黒斑が肩と胴下部にある。内
面は大半が細かく剝離する。3は甕で口唇部に交互
に指頭押圧を施す。表面の刷毛目は目が細かい。

4～20は破片である。8～12の甕は口唇部に交互
に指頭押圧を、13は縄文を施す。19は台付甕の脚部

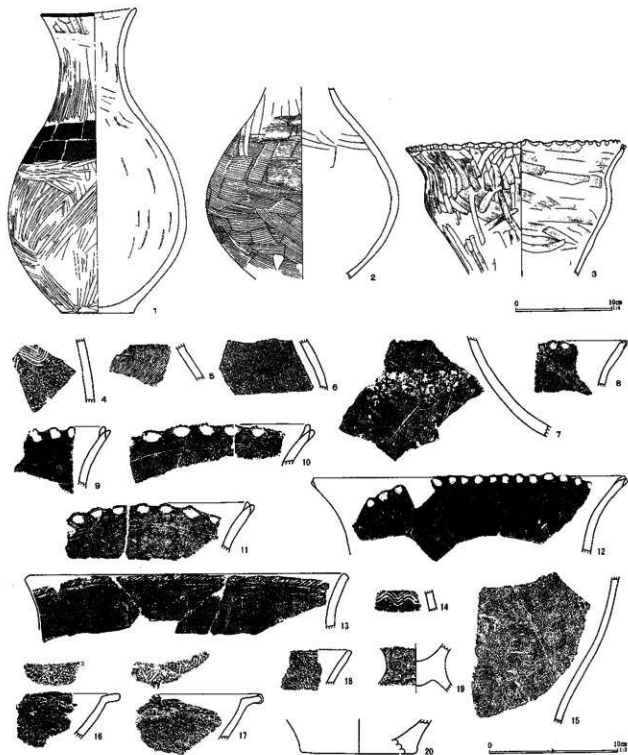
と見られる。

住居の時期は弥生時代中期と考えられる。

3. 古代以降の遺構と遺物

(1) 溝跡

野本氏館跡では、今回の第5次調査で合計4条の



第22図 第2号住居跡出土遺物

溝跡が検出された。野本氏館跡の第1次～第4次調査では、溝跡22条と堀跡1条が検出されている。第22号溝跡が第1次調査で一部調査されており、野本氏館跡の溝跡は合計で25条となる。

第22号溝跡 (第23図)

第22号溝跡はBT・BU-13・14グリッドに位置している。第1号、第2号住居跡、および第23号溝跡を壊している。第1次調査で一部調査をされている。第22号溝跡は西から東方向に直線的に延び、2条

が平行している。東側は調査区域外まで延びている。主軸方向はN-75°-Eをとる。北側の溝は長さ10.1m、幅0.9~1.85m、深さ0.28mを、南側の溝は長さ7.6m、幅0.7~1.0m、深さ0.56mを測る。西側、東側の溝は同時に掘られ、同一の溝として機能していたと推測される。

出土遺物は少なく、住居跡の遺物と見られる弥生土器のほか、近世までの遺物を含む。3点を図示した(第26図)。第26図1は常滑の甕の底部である。2は近世の火鉢で、3は古代の平瓦の破片である。

第22号溝跡の時期は、常滑の甕から中世と考えられる。

第23号溝跡 (第23図)

第23号溝跡はBS-12、BT-12-13、BU-12-13グリッドにかけて位置している。第1号住居跡を壊している。第22号溝跡に壊される。

第23号溝跡は北西から南東方向に直線的に延び、2条が平行している。主軸方向はN-21°-Wをとる。西側の溝は長さ24.4m、幅0.85~2.5m、深さ0.48mを測る。東側の溝は長さ26.1m、幅0.35~1.5m、深さ0.56mを測る。断面は逆台形を呈する。

西側の溝の方がやや幅広で、溝の両側にごく浅いテラスを有する。テラスはBS12~BT12グリッドにかけて良く残されている。第23号溝跡は、調査区北端で西にやや屈曲して調査区外へ続く。南北の延長は不明である。西側、東側の溝は同時に掘られ、同一の溝として機能していたと推測される。

出土遺物は少なく、第1号住居跡の遺物と見られる弥生土器のほか、近世までの遺物を含む。8点を図示した(第26図)。第26図4はかわらけ、5は片口鉢である。7は鉢で在地産の土器と考えられる。

6は滑石製石鍋である。石鍋は10世紀に九州に出現し、16世紀に姿を消す。関東地方では鎌倉を中心に発見されており、中世前半に広く流通したと考えられている。長崎県の西彼杵産である。

8~11は近世の遺物である。8は把手を持ち、胴

部に楕円形の窓が開く火鉢類である。内外面に若干煤が付着する。口縁が内傾し丸形の胴で窓を持つものは、七厘や七厘形の茶道具の風炉に類例が認められる(新宿区内藤町遺跡例など)。内面の口縁直下が帯状に剝離し、剝離部分に五徳状の突起が付く可能性もあろう。口唇部に焼印がある。「武洲□/正横?」の文字が認められ、屋号等を表すと考えられる。

10は焙烙で平底に近い。11は大黒様の土人形であり、型作りで底面を閉じている。19世紀代と見られる。

第23号溝跡は近世の遺物を含むが、廃絶後層に流れ込んだものと見られる。溝の時期は中世と考えられる。

第24号溝跡 (第23・24図)

第24号溝跡はBT-11・12、BU-12、BV-12グリッドにかけて位置する。

第24号溝跡は北西から南東方向に直線的に延びている。主軸方向はN-21°-Wをとる。溝は削平の影響で一部途切れるが、全長は確認された範囲で24.5mを測る。

溝の北側部分は長さ9.4m、幅0.4~1.25m、深さ0.07~0.3m、南側は長さ5.7m、幅0.38~0.55m、深さ0.02~0.1mを測る。断面は逆台形を呈する。

出土遺物は少なく、2点を図示した(第26図)。第26図12は鉢、13は鍋で共に在地産である。

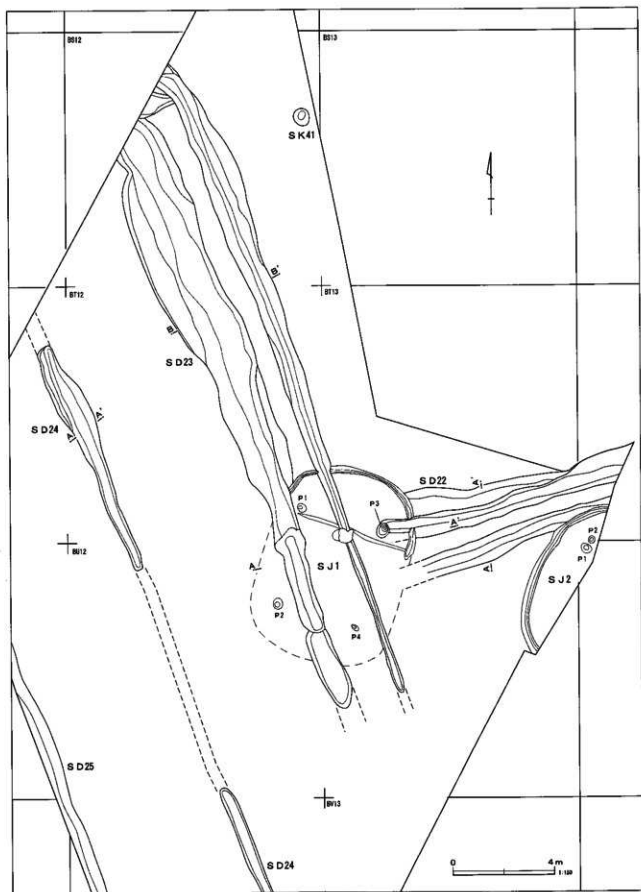
第24号溝跡の時期は中世と考えられる。

第25号溝跡 (第24図)

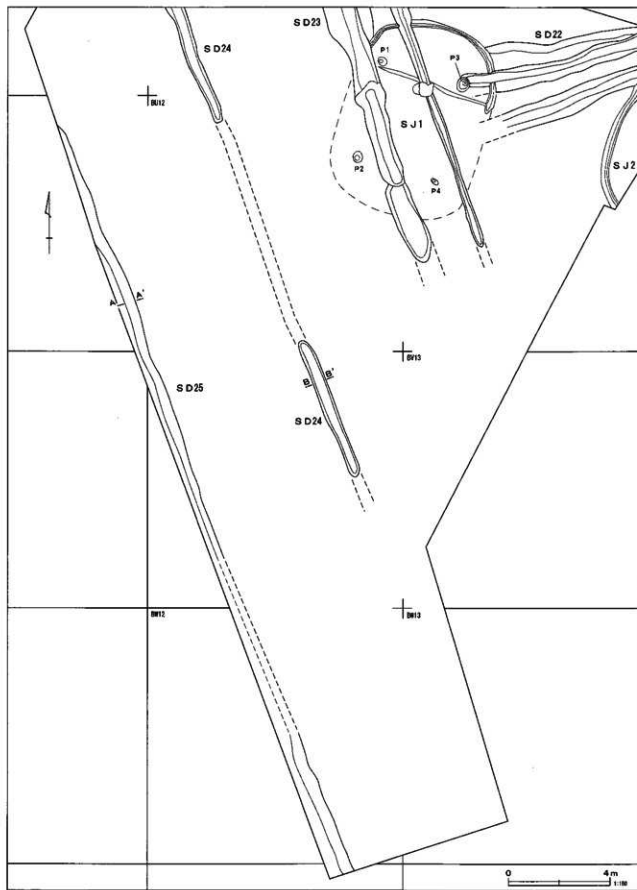
第25号溝跡はBU・BV-11・12、BW-12、BX-12グリッドにかけて位置する。調査区に接して延びるため、溝の南西側半分は調査出来なかった。

北西側・南東側の端は共に調査区域外まで延びている。確認できた全長は31.5mである。途中で削平の影響で途切れるが、幅が確認された範囲で0.84m、深さ0.11~0.55mを測る。

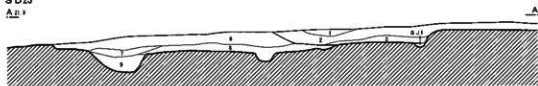
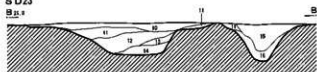
出土遺物は1点を図示した(第26図)。14は古瀬戸



第23图 沟迹平面图(1)



第24図 溝跡平面図(2)

SD23
A-B'SD23
B-B'SD22
A-B'SD24
A-B'SD24
B-B'SD25
A-B'

SD22 (1~5層), SD23 (6~16層)

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック含む
- 3 暗褐色土 ロームブロック・炭化物粒子多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック含む
- 6 暗褐色土 ローム粒子含む 部分的に粘土粒子・炭化物粒子を含む
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量
- 8 暗褐色土
- 9 黒褐色土 ローム粒子・径1cm前後のロームブロック含む
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量
- 11 黄褐色土 ローム質 ラフトローム多量
- 12 暗褐色土 ローム粒子多量
- 13 黄褐色土 ロームブロック多量
- 14 灰黄褐色土 ローム砂利多量
- 15 暗褐色土 ローム粒子多量 10層によく似る
- 16 黄褐色土 ロームブロック多量

SD24

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ソフトロームブロック多量 炭化物少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量 小石含む

SD25

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量 砂・小石多量

SK41



SK41

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ソフトロームブロック多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量 小石含む

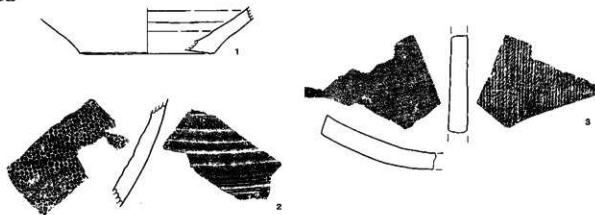
0 2m

第25図 溝跡断面図・土坑

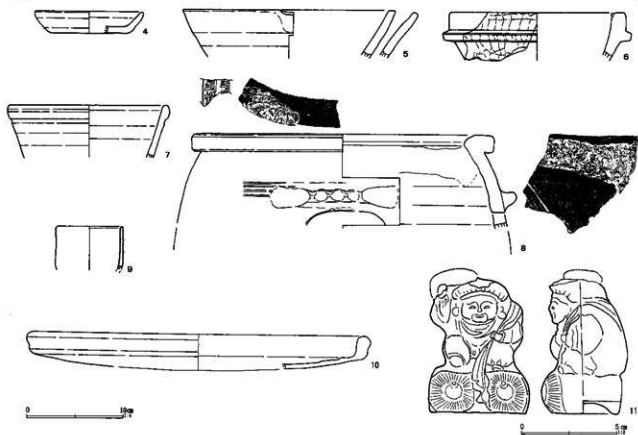
第7表 溝跡出土遺物観察表 (第26図)

探検番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考	
26 1	SD22	陶器	常滑埴				白粒 砂	普通	にぶい赤褐	5		
26 2	SD22	土器	火鉢		[4.7]	(14.0)		普通	にぶい黄橙	5	外面刻削 (鱗状)	
26 3	SD22	瓦	平瓦	長さ[10.2]	幅[12.0]	厚さ2.0		良好	灰	10	凸面網目叩き 焼き硬い	
26 4	SD23	BS12	土器	かわらけ	(11.2)	[2.3]	(8.0)		普通	にぶい黄橙	20	
26 5	SD23	BU12	土器	片口鉢	(21.9)	[5.0]			普通	にぶい黄橙	5	在地産
26 6	SD23	BT12	石製品	石鏝	(18.0)	[5.0]				10	長崎県西彼杵産 跡がやや歪下する 滑石製	
26 7	SD23	BU13	土器	鉢	(16.4)	[5.5]			普通	黒褐	5	
26 8	SD23	BU12	土器	風炉 ⁴	(31.6)	[9.8]			普通	にぶい褐	5	風炉又は七厘 口縁に刻印「武州 □/正徳？」
26 9	SD23	BT13	陶器	小碗	(6.8)	[4.5]			良好	灰白	10	透明釉 瀬戸・美濃系か
26 10	SD23	BT12-13	土器	焙烙	(35.0)	[3.5]	(34.6)		普通	にぶい橙	20	外面煤付著 平底
26 11	SD23	BU13	土製品	人形	高さ[7.0]	幅5.3	厚さ4.5		普通	橙	90	人黒様 型合わせ 底面閉塞
26 12	SD24	土器	鉢	(24.2)	[7.2]		砂 灰	普通	暗灰	5	在地産	
26 13	SD24	土器	鍋	(29.0)	[5.3]			普通	暗灰黄	5	在地産	
26 14	SD25	陶器	四耳壺	(3.1)				普通	灰オリーブ	5	古瀬戸	

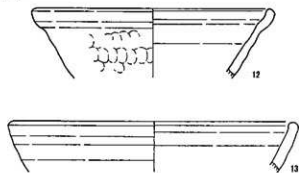
SD22



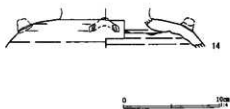
SD23



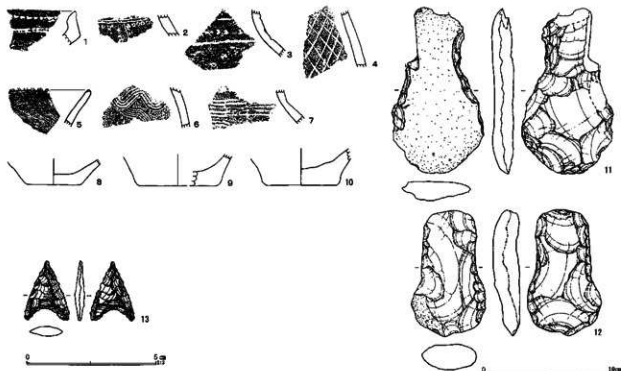
SD24



SD25



第26図 溝跡出土遺物



第27図 遺構外出土遺物

第8表 遺構外出土遺物観察表(第27図)

探検番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
27 3	SD23	BT13	弥生土器 壺		[3.9]				橙	5	割突文
27 4	SD23	BS12	弥生土器 壺		[4.6]		白粒砂		にふい濁	5	斜格子文
27 5	SD22		弥生土器 甕		[2.9]				橙	5	口唇部刻み 外面刷毛
27 6	SD23	BT13	弥生土器 甕		[3.2]		白粒砂		褐	5	櫛溝文
27 7	SD23	BT13	弥生土器 甕		[2.6]		白粒砂		褐	5	雁状文
27 8	SD23	BU13	弥生土器 底部		[2.0]	(4.0)	白粒砂		褐	5	
27 9	SD22		弥生土器 底部		[2.5]	(6.0)	白粒砂		橙	5	
27 10	SD23	BT13	弥生土器 底部		[2.9]	5.6	白粒砂		褐	5	
27 11	SJ22		石器 打製石斧	長さ12.9	幅7.2	厚さ1.8	重量164.2			100	砂岩
27 12	SD22		石器 打製石斧	長さ9.8	幅5.8	厚さ2.1	重量127.2			100	ホルンフェルス
27 13	SD23	BU13	石器 石鏃	長さ2.4	幅1.8	厚さ0.4	重量0.8			100	黒曜石

の四耳壺の破片である。

第25号遺跡の時期は中世と考えられる。

(2) 土坑

第41号土坑 (第25図)

BS-12グリッドに位置する。平面形は不整形である。主軸方向はN-33°-Wをとる。規模は長軸0.

7m、短軸0.6m、深さ0.46mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物として、13点を図示した(第27図)。

1・2は竹管文を施す縄文土器で、1は諸磯b式、2も諸磯式である。3~10は弥生土器である。斜格子文や櫛溝文が認められる。

11~13は石器である。11は砂岩製、12はホルンフェルス製の打製石斧である。13は小型の無基石鏃である。

V 山王裏遺跡

1. 概要

山王裏遺跡は、西浦遺跡の北東に位置し、上川入遺跡に隣接して台地上に広がる遺跡である。今回の発掘調査は、一般国道407号東松山バイパスの道路改築工事とともに事前調査として実施された。

山王裏遺跡では、国道407号の道路改築工事とともに発掘調査が過去に6回実施され、報告書が刊行されている(山本・西井1997)。今回(第7次調査)の調査範囲は、国道254号(旧道)の下野本(北)交差点と接続する部分であり、調査面積は1,700㎡である。

表土除去を行ったところ、表土から、遺構確認面とした地山の関東ローム層までごく浅く、土層の堆積は西浦遺跡・野本氏館跡よりもさらに少なかった(第28図)。調査地点の平均標高は29.6mである。現地表面から10cm足らずは現代の砂利敷きの攪乱で、その下に暗褐色土の包含層が約15cmの厚さで広がる。包含層の時期は近現代にまで及ぶ。地山の関東ローム層の標高は29.2~29.5mを測り、北側がやや低いもの、全体にただらかである。

山王裏遺跡では国道254号の道路工事とともに

2. 検出された遺構と遺物

(1) 溝跡

今回の第7次調査で検出された溝跡は、11条である。溝跡と土坑の遺構番号は、第6次調査までの遺構番号から続けて用いた(SD31~SD40)。

溝跡から出土した遺物はほとんど無いが、第36号溝で覆土上層に浅間A火山灰を含み、遺構外も含め18~19世紀代の遺物が散見されることから、遺構のいくつかは近世の可能性がある。

第31号溝跡(第30・33図)

第31号溝跡はB・C-49グリッドに位置している。北西-南東方向に延び、北西側は調査区域外まで延びる。主軸方向はN-52°-Wをとる。規模は長

調査で、古墳時代以降の遺構・遺物が多数検出されている(山本1991・1995)。国道407号に関わる第1次~第6次の調査においては、溝跡30条、土坑61基、竪穴状遺構1基が検出された。

今回の調査で検出された遺構は溝跡11条、土坑3基、及びピットである。出土遺物はコンテナ1箱であり、遺物の時期は縄文時代、古墳時代、古代、近世などである。

検出された遺構の特徴を以下にまとめる。

溝跡は11条が検出された。軸方向が北東-南西方向と、北西-南東方向をとるものの二種類あり、両者は新旧関係をもつ。また、第40号溝はコの字状に延びることが確認され、敷地等の区画溝であることが推測される。出土遺物はほとんどなく、古代、近世の遺物が極少量認められた。必ずしも遺構の構築時期を確定できないが、複数の時期に亘って作られた遺構群と考えられる。

土坑は3基が検出された。いずれも出土遺物がないため時期は不明である。

き10.8m、幅0.7~1.2m、深さ0.05~0.16mを測る。断面は皿状を呈する。

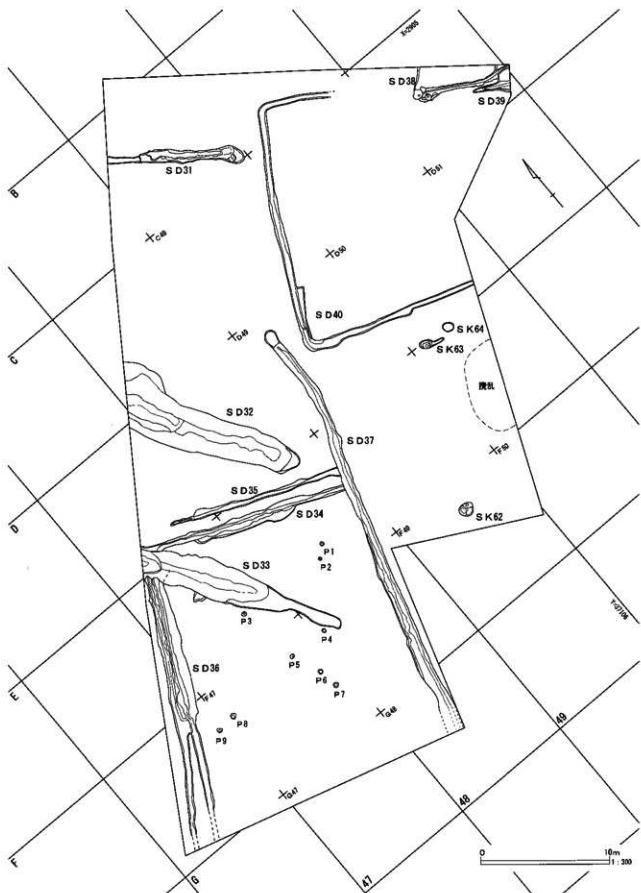
溝の南東端から約6.5mの間、南西側に幅約20cmのテラスを持つ。テラスとはほぼ同じ高さ、2層上面で硬化面が検出された。溝は硬化面の西端で幅が50cmほど狭くなり、深さもやや深くなる。

出土遺物はほとんどなく、1点を図示した(第34

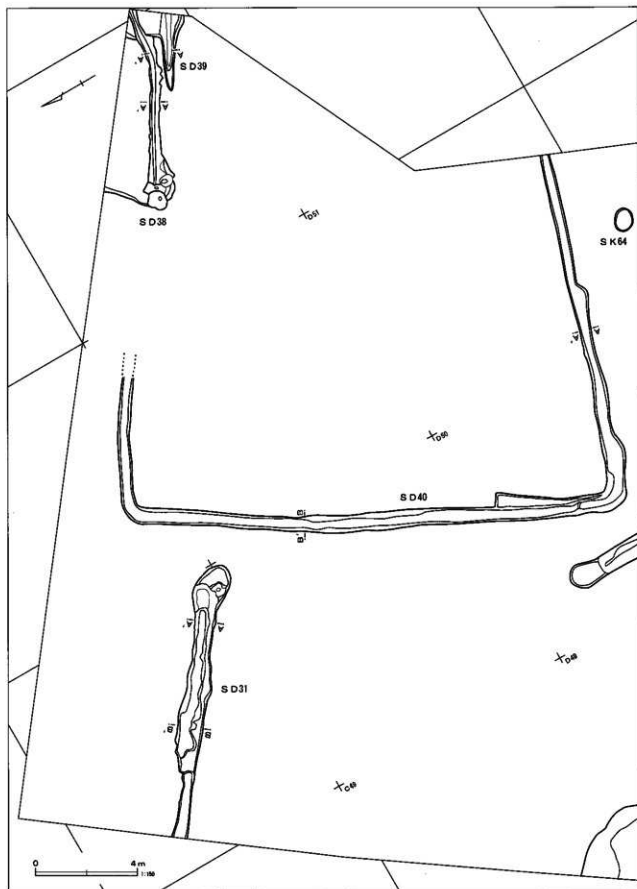


1 遺土(砂利敷)
2 表土(暗褐色土)
3 地山(関東ローム)

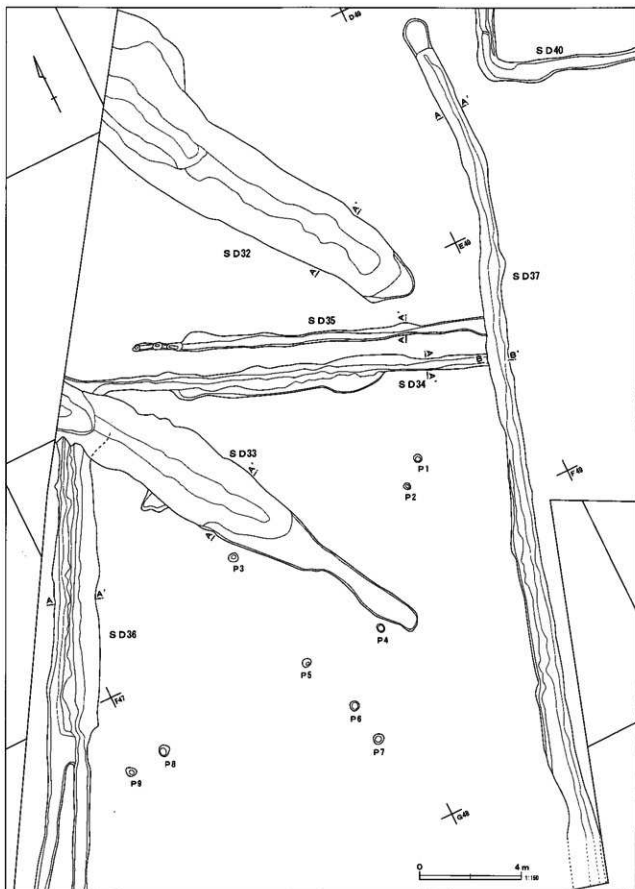
第28図 山王裏遺跡基本層序



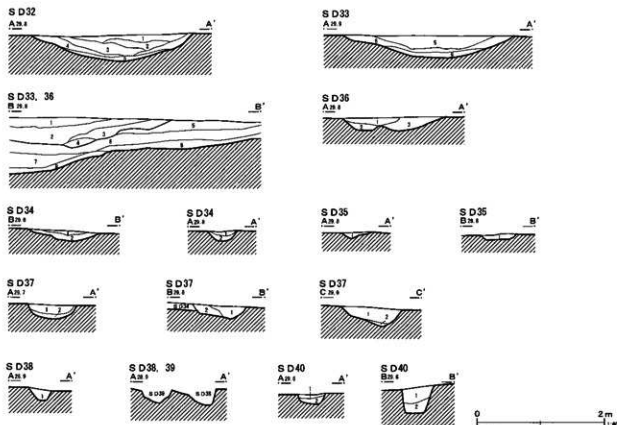
第29圖 山王墓遺跡全体圖



第30圖 溝跡平面図(1)



第31図 溝跡平面図(2)



SD32	1 褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	2 暗褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	3 暗褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	4 暗褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	5 褐色土	ロームブロック多量	しまりあり
	6 褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
SD36(1~4層), SD33(5~9層)	1 に近い黄褐色土	火山灰粒子(洗明A)・ローム粒子多量	しまりあり
	2 褐色土	火山灰粒子(洗明A)・ローム粒子少量	しまりなし
	3 褐色土	ロームブロック多量	しまりあり
	4 暗褐色土	ローム粒子・焼土粒子少量	しまりなし
	5 暗褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	6 黄褐色土	ローム粒子多量	しまりなし
	7 黄褐色土	径2~3mmのロームブロック少量	しまりなし
	8 黄褐色土	炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子少量	しまりあり
	9 暗褐色土	ローム粒子多量	しまりあり
	10 暗褐色土	黄褐色粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量	しまりあり

SD34	1 暗褐色土	ローム粒子含む	しまりややあり
	2 暗褐色土	ロームブロック多量	しまりややあり
SD35	1 暗褐色土	黄褐色土粒子混入	しまりややあり・粘性なし
SD37	1 褐色土	ローム粒子少量	しまりややあり
	2 暗褐色土	ロームブロック少量	しまりややあり
SD38	1 暗褐色土	茶褐色ローム粒子・ロームブロック含む	しまりあり
SD40	1 灰黄褐色土	ローム粒子少量	しまりなし
	2 に近い黄褐色土	ロームブロック少量	しまりあり

第32図 溝跡断面図

図)。溝の時期は不明である。

第32号溝跡(第31図)

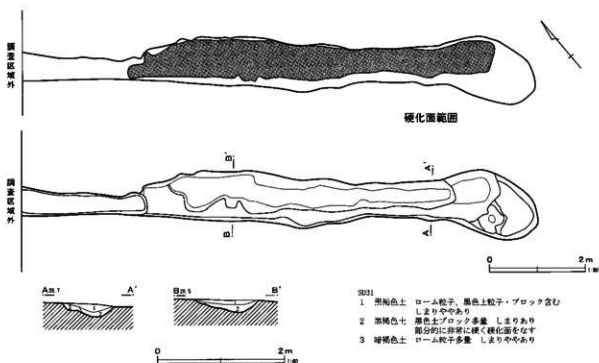
第32号溝跡はC-48、D-47・48、E-48グリッドに位置している。北西-南南東方向に伸び、北西側は調査区域外まで延びる。主軸方向はN-30°-Wをとる。規模は長さ14.8m、幅2.2~3.7m、深さ0.36~0.78mを測る。断面は皿状で、北西に行くほど深くなり、調査区端で0.78mを測る。

出土遺物はほとんどなく、2点を図示した(第34図)。溝の時期は不明である。

第33号溝跡(第31図)

第33号溝跡はD-47、E-47・48、F-48グリッドに位置している。北西-南南東方向に伸び、第32号溝跡とはほぼ並走する。北西側は調査区域外まで延び、第36号溝跡に一部壊される。第34号溝跡との新旧関係は不明である。主軸方向はN-31°-Wをとる。規模は長さ16.8m、幅0.7~2.9m、深さ0.32mを測る。断面は皿状を呈する。北西に行くほど深くなり、調査区端で深さ0.76mを測る。

遺物は土器片が数点出土した。時期は後述する第36号溝跡の特徴から、18世紀以前と考えられる。



第33図 第31号溝跡

第34号溝跡 (第31図)

第34号溝跡はD・E-47・48グリッドに位置している。西北西-東南東方向に延びている。西側は第33号溝跡、東側は第37号溝跡と接続するが、両者との新旧関係は不明である。

主軸方向はN-68°-Wをとる。規模は長さ16.9m、幅0.5mを測る。溝は途中で浅いテラスを持ち、幅1.3mほどに広がる。深さは0.05-0.17mを測る。

出土遺物はほとんど無い。溝の時期は不明である。

第35号溝跡 (第31図)

第35号溝跡はD・E-47・48グリッドに位置している。西北西-東南東方向に延び、第34号溝跡と平行である。東側で第37号溝跡に接続するが、新旧関係は不明である。

主軸方向はN-68°-Wをとる。規模は長さ14.0m、幅0.32-0.75m、深さ0.05-0.11mを測る。

出土遺物はほとんどなく、土器数点が得られたのみであった。溝の時期は不明である。

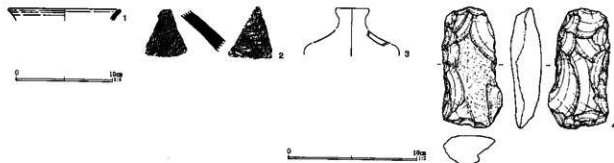
第36号溝跡 (第31図)

第36号溝跡はE-46・47、F-46グリッドに位置する。北東-南西方向に延びている。北東側で第33号溝跡を壊すが、これより北東側の延長は確認されなかった。溝は断面浅い箱形の溝が2条平行して延びる。北側では一本の溝であるが、南西側に延びるに従って浅くなり、外見上2条に分かれる。溝の南西端は調査区域外に延びると見られる。

主軸方向はN-29°-Eをとる。規模は、全長20.7m、幅0.3-1.4m、深さ0.09-0.27mを測る。

第36号溝跡の最上部を埋める1層は、その中に浅間A火山灰の粒子を多量に含む。浅間A火山灰は、浅間山の噴火によって飛米・降下した火山灰である。天明3(1783)年の浅間山天明噴火によって噴出し、埼玉北西部に最大で5cmほど積もったと考えられている。1層中の浅間Aは明確な層を成さず、溝の廃絶時期の下限を示唆している。

遺物は土器が数点出土した。溝の時期は浅間A火山灰の存在から、18世紀中葉以前と考えられる。



第34図 溝跡出土遺物

第9表 溝跡出土遺物観察表(第34図)

観測番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
34 1	SD31	D48	須恵器 須恵器	環 甕	(11.4)	[1.3]		普通 普通	灰白 灰	5	
34 2	SD32										
34 3	SD32	陶器	饰物	胴径(10.5)	器高[1.7]			良好	緑灰	5	径不定 瀬戸・美濃系
34 4	SD38	C51	石器	打製石斧	長さ9.4	幅4.8	厚さ2.4	重量117.3		100	ホルンフェルス

第37号溝跡 (第31図)

第37号溝跡はD-49、E-48・49、F-48、G-48グリッドに位置している。北東-南西方向に延び、北東の約10mは北に向かって屈曲する。第34号・35号溝跡との新旧関係は不明である。南西端は攪乱を受けるが、調査区域外まで延びると見られる。

主軸方向はN-17°-Eをとる。規模は長さ33.0m、幅0.55~1.2m、深さ0.18~0.4mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第38号溝跡 (第30図)

第38号溝跡はC-51・52グリッドに位置している。北西-南東方向に直線的に延び、調査区域外ま

で延びる。第39号溝跡との新旧関係は不明である。

主軸方向はS-61°-Eをとる。規模は長さ7.9m、幅0.3~1.0m、深さ0.14~0.3mを測る。

出土遺物はほとんど無く、時期は不明である。

第39号溝跡 (第30図)

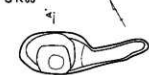
第39号溝跡はC-51グリッドに位置している。北西-南東方向に延び、調査区域外へと続く。第38号溝跡との新旧関係は不明である。主軸方向はS-61°-Eをとる。規模は長さ3.0m、幅0.4~0.9m、深さ0.13~0.2mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

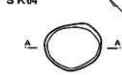
SK 62



SK 63



SK 64



SK62

- 1 暗褐色土 炭化物粒子・ローム粒子・ブロック少量 しまりややあり
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ブロック含む しまりややあり
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック多量 しまりややあり

SK63

- 1 暗褐色土 炭化物粒子・白色炭粒子(バミス)・ローム粒子含む しまりややあり
- 2 暗褐色土 1層とはほぼ同じ ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量 しまりややあり
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量 しまりややあり

SK64

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 ローム粒子含む しまりやあり



第35図 土坑

第10表 ビット一覧(第31図)

遺構番号(新)	遺構番号(旧)	直径(m)	深さ(m)
1	E48G Pit 2	0.32	0.16
2	E48G Pit 1	0.28	0.16
3	E47G Pit 1	0.38	0.14
4	F48G Pit 1	0.32	0.09
5	F47G Pit 2	0.38	0.28
6	F47G Pit 3	0.38	0.18
7	F47G Pit 4	0.42	0.12
8	F47G Pit 1	0.44	0.18
9	F46G Pit 1	0.42	0.20

第40号溝跡(第30図)

第40号溝跡はB-50、C・D-49・50グリッドに位置している。調査区内を「コ」の字形に延びる区画溝である。

溝は北東-南西方向を基準にすると、主軸方向はN-30°-Eである。溝は全長38.2mで、北側が確認された範囲で長さ5.5m、西側が長さ19.0m、南側が長さ13.7mをそれぞれ測る。幅は0.5~1.0m、深さ0.15~0.4mを測る。

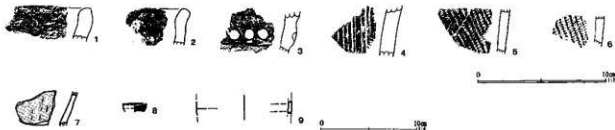
出土遺物はなく、時期は不明である。

(2) 土坑

土坑は3基検出された(SK62~SK64)。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。

第82号土坑(第35図)

F-49グリッドに位置している。平面形は不整形である。主軸方向はN-84°-Eをとる。規模は長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.21mを測る。



第36図 遺構外出土遺物

第11表 遺構外出土遺物観察表(第36図)

標記番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
36	7	B49	上脚器	壺	[3.6]			普通	赤	5	胴部 内外面赤彩
36	8	E48	須恵器	蓋	[2.4]	[0.8]		普通	淡黄	5	P2出土 蓋つまみ部分
36	9	表探	陶器	徳利	胴径(10.0)	器高[1.5]		良好	灰緑	5	径不定 瀬戸・美濃系

第83号土坑(第35図)

D・E-50グリッドに位置している。平面形は不整形である。東に向かって延びている。主軸方向はN-66°-Wをとる。規模は長軸2.0m、短軸は西側で0.66m、深さ0.25m、東側は短軸0.26m、深さ0.069mを測る。

第84号土坑(第35図)

D・E-50グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-46°-Wをとる。規模は長軸0.88m、短軸0.7m、深さ0.11mを測る。

(3) その他の遺構と遺物

ビット(第10表)

調査区南側で9基のビットを検出した。全体に散在し、性格は不明である。本書中では通し番号を付した。

遺構外出土遺物(第36図)

9点を図示した。1~6は縄文土器である。1・2は口縁部で中期と見られる。3は刺突文を施す加曾利E式。4は条線を施す中期の土器である。5は縄文を施す胴部片で諸磯a式。6も同じ前期と見られる。

7は土師器の埴、8は須恵器の蓋のつまみ部分である。9は瀬戸美濃系の徳利である。

VI 銭塚遺跡

1. 概要

銭塚遺跡は、都幾川右岸に位置する遺跡であり、城敷遺跡、反町遺跡とともに都幾川による沖積低地に広がっている。今回の発掘調査は、一般国道407号東松山バイパスの道路改築工事にともなう事前調査として実施された。今回（第1次調査）の調査範囲は、都幾川に新たに架かる橋の降り口にあたる部分であり、調査面積は3,500㎡である。

遺構確認作業では、当初、低地特有の土壌において遺構確認に困難し、調査区の北壁、東壁に幅広のトレンチを掘り下げて遺構を確認した。基本層序に示されるように（第38図）、調査地点の平均標高は約19.7mであり、近年までの水田面（2層）が20cmほどの厚さで全体に広がる。一部は2層直下から掘り込まれるが、多くの遺構はさらに30～40cm下の面（14層上面）から掘り込まれる。遺構確認面は、およそ14層上面に当たる標高約19.1mである。

9層、11層、14層、15層～20層はいずれも自然堆積層の可能性が高い。9層、14層、16層は土壌が全体に有機物によって黒味を帯びており、黒ボク土と同様に腐植が集積されたものと考えれば、陸化していた可能性もあろう。9層と11層は互いの層の境目が不明瞭で、不整合面の認識が容易でない。4層は土壌の特徴から11層に近く、9層と11層が土壌化作用により一体化したものと捉えられる。14層は調査区全体に広がる層で、15層や16層を壊して不整合面をなしている。15層から20層は、西から東の方向、及び南から北の方向に1～2度程度の傾きを有する。すなわち全体として北東方向にごく緩やかに傾斜する地形となっている。

これは一帯の低地の地形が、東へと流れる都幾川の沖積作用によって形成されたことを反映していると考えられる。遺構確認面もこのような地形を反映し、調査区のDグリッドラインより北側では、全体的に確認面も北側に低くなっている。

調査区北西端で、16層中から古墳時代の土師器が検出された。そのため調査区北西隅を東西・南北とも10m近くの範囲で深く掘り下げ、遺構確認を行った。その結果、遺構は発見されなかったが、A1グリッドを中心として、多数の土器が検出された。

土器は6～7mの範囲に比較的広く分布し、ほぼ完形に復元される甕などを含む。遺物の時期は古墳時代前期が最も多いものの、古墳時代中期・後期の遺物も混じり、時期的には幅広い様相を示す。土器はあまり水磨されておらず、ごく近くからもたらされたものと判断される。時期的まとまりが少なく、遺構も確認されないため、周辺から流れ込んだ遺物が土層中に包含されたものと考えられる。本報告書では遺構外遺物として、グリッド単位で報告することとした。

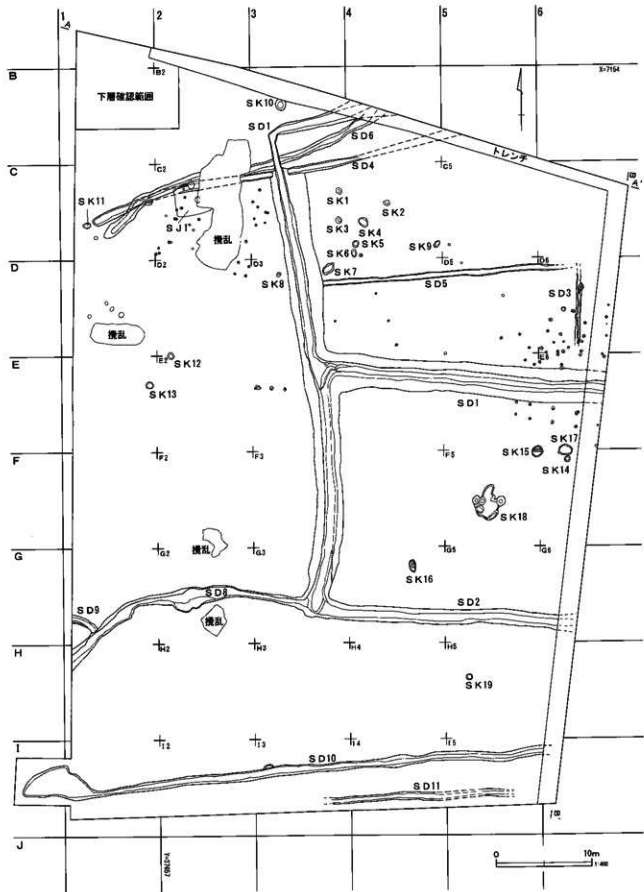
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡10条、土坑19基などである。出土遺物はコンテナ8箱であり、遺物の主な時期は古墳時代、平安時代、中近世である。

検出された遺構の特徴を以下にまとめる。

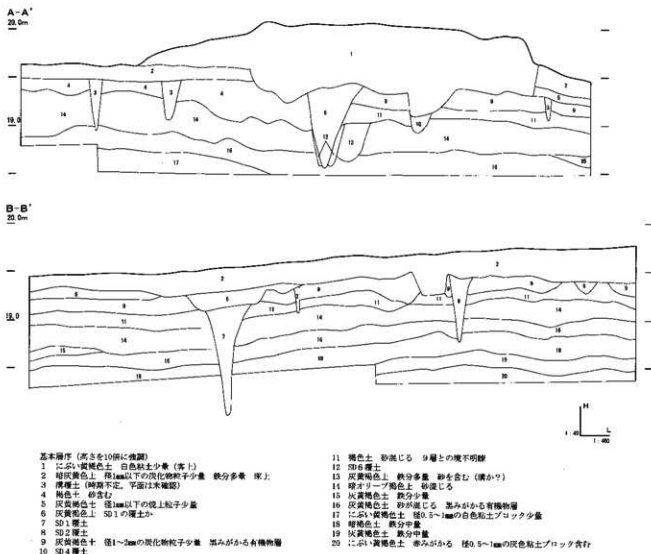
住居跡は1軒が検出された。時期は平安時代と考えられる。炭化した木材や屋根材と考えられる茅のような植物類が床面上で検出された。遺物は住居内のビットから複数出土している。

溝跡は、合計10条が検出された。第1号溝跡、第2号溝跡はコの字状、L字状に走る溝で、互いに新旧関係をもつ。区画溝と考えられる。他の溝跡も新旧関係が確認され、複数の時期に及ぶ。第10号溝跡、第11号溝跡は、ほぼ東西方向に直線的に走る溝である。並行することから、道路跡の可能性も指摘されるが、硬化面などは確認されなかった。溝跡の出土遺物は、主に平安時代から中世に及ぶ。

土坑は19基検出された。遺物をともなうのは数基にとどまり、多くは時期不明である。性格は定か



第37図 銭塚遺跡全体図



第38図 銭塚遺跡基本層序

ないが、形態・規模が類似する土坑が多い。

ピットは100基近く検出された。分布範囲は片寄るものの、柱穴として並ぶ例はほとんどない。そのほか遺構外から、前述した古墳時代の土器のほか、古代・中近世の土器、土鍬や紡錘車が出土している。

今回の調査では、中世の遺構の検出が注意される。古墳時代については遺物のみであり、古代の遺構・

遺物も量的には少ない。

近年、隣接する城敷遺跡第1次～第3次、銭塚遺跡第2次～第3次調査において、古墳時代～奈良・平安時代の遺構が多数検出されており、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、平成15年～17年度調査)、今後の調査報告の進展によって、銭塚遺跡周辺の様相が次第に明らかになるものと期待される。

2. 検出された遺構と遺物

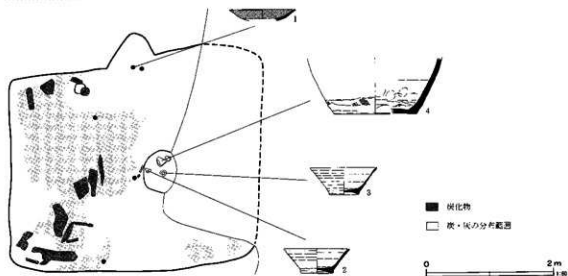
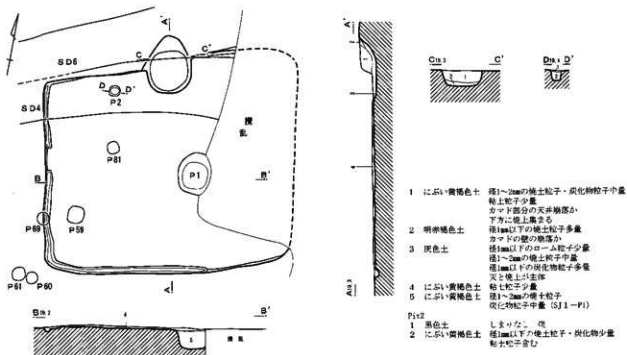
(1) 住居跡

第1号住居跡 (第40図)

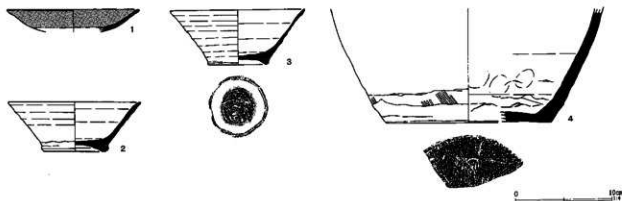
第1号住居跡はC-2グリッドに位置している。確認面の標高は約19.3mである。住居跡の東側は掘

乱によって壊され、北側は第6号溝跡を壊し、第4号溝跡に壊される。

住居跡は周溝とカマドが確認された。カマドを除き、覆土はほとんど確認出来なかった。周溝は北西



第39図 第1号住居跡



第40図 第1号住居跡出土遺物

第12表 第1号住居跡出土遺物観察表(第40図)

種類番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
40 1	灰釉陶器	皿	(13.4)	[2.3]		白粒 黒粒 砂	良好	灰白	10	釉刷毛痕りか
40 2	須恵器	高台付埴	(13.6)	5.0	(7.0)	白粒 赤粒 黒粒 砂	不良	にふい橙	40	P1出土 酸化焙焼成か
40 3	須恵器	高台付埴	(13.8)	5.6	6.3	白粒 赤粒 砂 礫	普通	にふい黄橙	65	P1出土 酸化焙焼成か
40 4	須恵器	罍		[11.7]	(17.1)	白粒 長 針 砂	良好	灰	20	P1出土 体部外面下着黒削り 南北企産

隅から南東にかけて確認できたが、一部途切れており、全周していない。

住居跡の平面形は方形である。主軸方向はN-14°-Wをとる。規模は東西が3.7m、南北が3.64m、深さ0.03mを測る。周溝の幅は0.12m、深さ0.05mを測る。住居にともなうピットは2基検出された。

カマドは北壁中央に設けられ、主軸方向はN-14°-Wをとる。規模は長軸0.88m、短軸0.68mを測る。P1は貯蔵穴などの土坑と考えられる。規模は最大径0.66m、深さ0.25mを測る。P2はカマドの西側に位置する。図中の他のピットは住居跡より新しい。

住居跡には床一面に炭と灰が広がっていた。北西、南西の隅では炭化材も検出された。床面やカマドから検出された遺物はほとんど無く、P1から3点がまとめて出土した(第40図)。

第40図1は灰釉陶器の皿、2・3は須恵器の高台付埴、4は須恵器の罍である。

住居の時期は平安時代と考えられる。

(2) 溝跡

第1号溝跡(第42・44図)

第1号溝跡は、B-3・4、C-3、D-3、E-3~6の各グリッドにわたっている。溝は調査区北東に位置し、「コ」の字形に延びる。第1号溝跡の北東および南東端は、調査区域外へと続いている。第1号溝跡は、第2号、第4号、第6号溝跡を壊している。

第1号溝跡は確認された範囲で全長68.5mを測る。溝の方向、規模について、便宜的に北側、西側、南側に分けて述べる。

北側の主軸方向はN-74°-Eをとる。規模は長さ13.5m、幅0.6~3.5m、深さ0.4mを測る。西側の主軸方向はN-11°-Wをとる。規模は、長さ25.0m、深さ0.57mを測る。南側の主軸方向はN-86°-Wをとる。規模は長さ30.0m、深さ0.47~0.52mを測る。断面は逆台形で壁の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物は溝の延長に比べて少なかった。北側では溝の確認面直上で、礫がまとめて検出された。礫は5~20cm台で、板破片に似た破片を含むが、明確な遺物をともなわない(第44図)。

出土遺物は6点を図示した(第46図)。第46図1はかわらけ、2は常滑産の鉢、3は在地の摺鉢である。4・5は混入で、4は近世の焙烙である。6は板破の台座部分と見られる。

溝の時期は中世と考えられる。

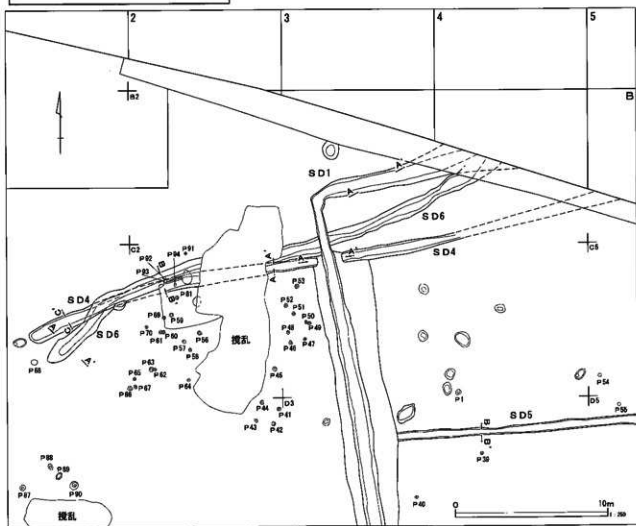
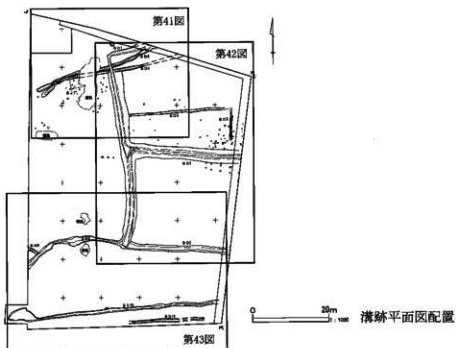
第2号溝跡(第42・44図)

第2号溝跡はE・F-3、G-3・4・5・6グリッドに位置している。溝は調査区東側に位置し、L字形に延びる。東端は調査区域外に延びている。

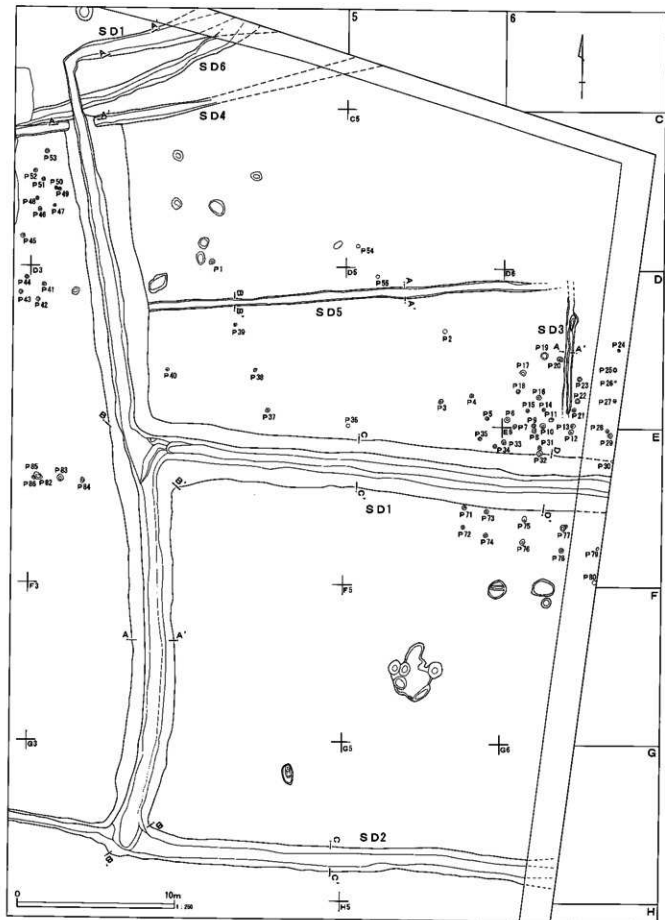
第2号溝跡は第1号溝跡とはほぼ同じ形態であり、第1号、第2号溝跡は南北に連続して構築される。北端は第1号溝跡に壊される。西端コーナーで第8号溝跡と接続するが、新旧関係は不明である。

第2号溝跡は確認された範囲で全長51.0mを測る。溝の方向、規模について、便宜的に西側、南側に分けて述べる。

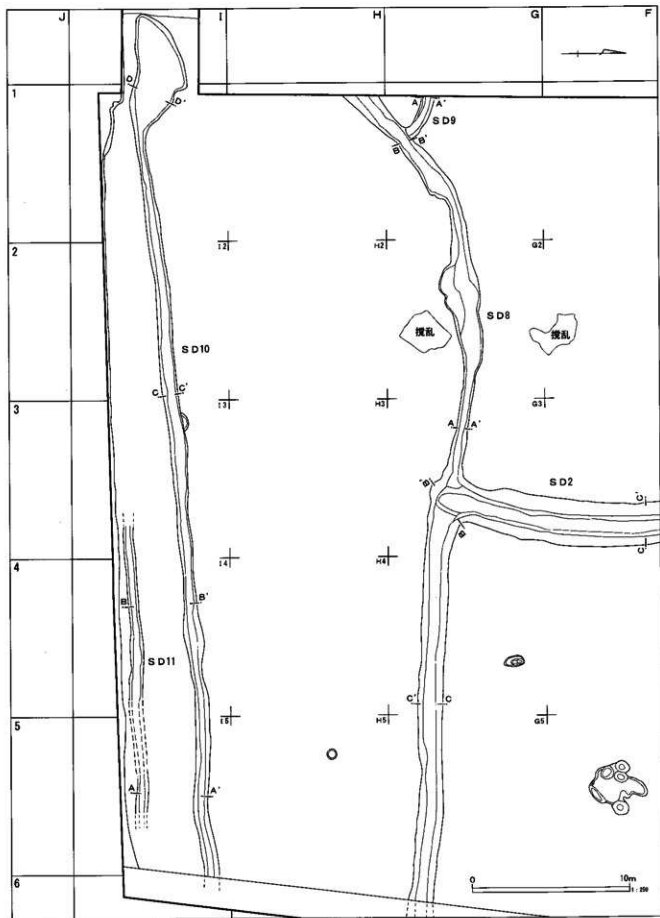
西側の主軸方向はN-3°-Eをとる。規模は長さ24.0m、幅1.3~2.8m、深さ0.47mを測る。南側の主軸方向はN-87°-Wをとる。規模は長さ27.0m、深さ0.24~0.42mを測る。断面は逆台形で壁の立ち



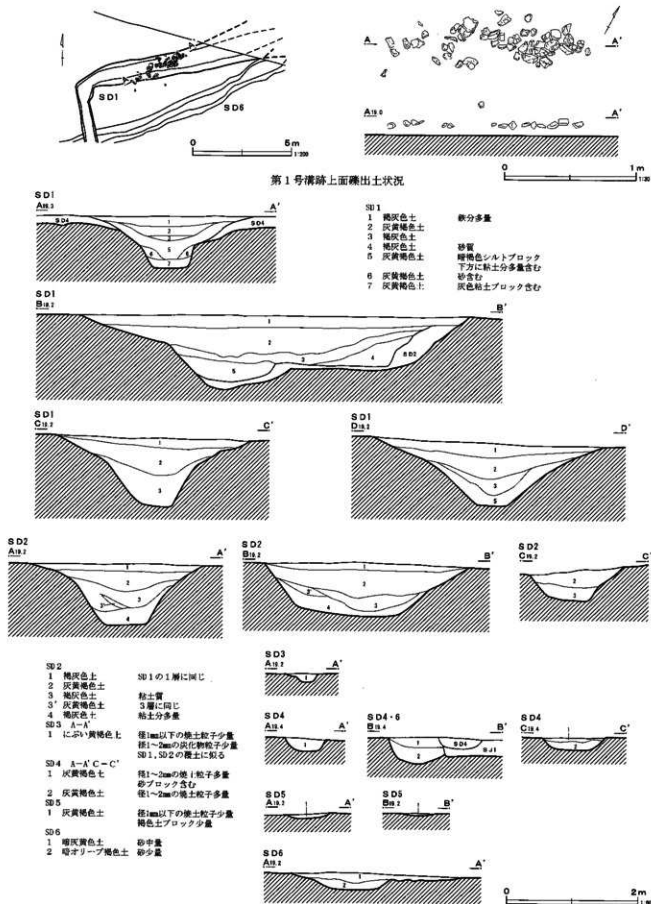
第41図 溝跡平面図(1)



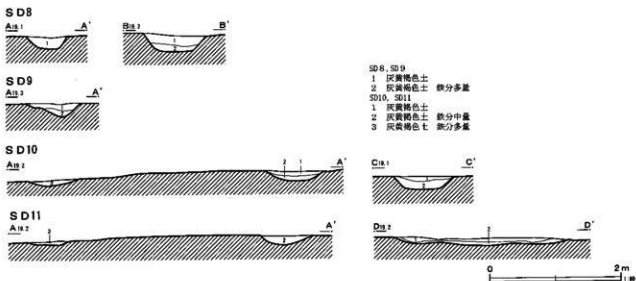
第42圖 溝跡平面圖(2)



第43图 溝跡平面图(3)



第44図 溝跡出土状況・断面図(1)



第45図 溝跡断面図(2)

第13表 溝跡出土遺物観察表(第46図)

神田番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
46 1	SD 1	土器	かわらけ		[2.0]	(4.4)	白粒 雲 赤粒 砂	普通	橙	60	土師質
46 2	SD 1	陶器	鉢		[6.5]	(12.2)	白粒 英 長 黒粒	良好	灰白	10	常滑産 内外面白釉、底面窯体付着
46 3	SD 1	土器	摺鉢		[7.3]	(12.4)	白粒 英 赤粒 砂	普通	灰	10	在地産 内面粗い器目
46 4	SD 1	土器	焙烙		[1.3]	(16.0)	白粒 雲 赤粒 砂	普通	黒	40	瓦質
46 5	SD 1	土師器	環	(12.0)	[4.9]		白粒 赤粒 黒粒 砂	良好	ぶい赤褐	30	内外面白赤
46 6	SD 1	板碑	台座	長さ19.4 幅14.1 厚さ2.7 重量926.4						20	緑泥片岩 列り込み入れる
46 7	SD 2	土器	かわらけ		[1.6]	(5.2)	白粒 角 赤粒 砂	良好	橙	45	口径不定 酸化焙烙成灰味 南比企産
46 8	SD 5	須恵器	環	(11.8)	(3.5)	(6.0)	角 黒粒 針 砂	不良	ぶい黄緑	25	
46 9	SD 5	須恵器	環		[1.5]	(6.0)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰	30	南比企産
46 10	SD 5	須恵器	環		[1.1]	(6.0)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰	20	南比企産
46 11	SD 5	須恵器	高台付壇		[1.5]	(6.2)	白粒 黒粒 針 砂	不良	灰	20	南比企産
46 12	SD 6	土師器	環	(12.0)	[3.7]		白粒 角 赤粒 黒粒 針	普通	明赤褐	35	内面放射暗文
46 13	SD 6	須恵器	環	(13.5)	[2.7]		白粒 黒粒 針 砂	不良	灰白	10	口径不定 南比企産
46 14	SD 6	須恵器	環		[1.6]	(8.4)	白粒 針 砂 礫	良好	灰	40	南比企産
46 15	SD 6	須恵器	環		[1.3]	(6.2)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰	25	南比企産
46 16	SD 6	須恵器	環		[2.2]	(5.6)	白粒 黒粒 針 砂	不良	灰白	30	南比企産
46 17	SD 6	須恵器	高台付壇		[2.2]	8.0	白粒 黒粒 針 砂	普通	灰白	50	見込み磨耗 南比企産
46 18	SD 6	須恵器	甕		[8.8]		白粒 針 砂 礫	良好	暗青灰	5	外：榑格子叩き内：同心円又当具 南比企産
46 19	SD 6	土師器	甕		[2.3]	(4.6)	白粒 角 赤粒 黒粒 砂	普通	灰褐	50	
46 20	SD 10	須恵器	高台付壇	(13.0)	4.0	(6.0)	白粒 黒粒 針 砂	不良	黒褐	40	酸化焙烙成に近い 南比企産
46 21	SD 10	須恵器	甕		[3.6]	(15.0)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰	35	内面自然釉 南比企産
46 22	SD 11	須恵器	環		[0.9]	(7.1)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰白	10	南比企産

上からは緩やかである。

出土遺物は少なく、1点を図示した(第46図)。第46図7はかわらけである。

溝の時期は中世と考えられる。

第3号溝跡(第42・44図)

第3号溝跡はD-6グリッドに位置している。溝は北-南方向に延びている。南北共に延長は不明である。

溝の主軸方向はN-3°-Eをとる。規模は長さ7.

5m、幅0.5m、深さ0.08～0.14mを測る。

出土遺物はほとんど無かった。緑泥片岩の破片が認められたが、板碑が不明である。

溝の時期は不明である。

第4号溝跡（第41・44図）

第4号溝跡はB-3・4、C-1～4グリッドに位置している。溝は北東-南西方向に延びる。攪乱を受けるほか、第1号住居跡、第1号溝跡に壊され、第6号溝跡を壊す。北東側は調査区域外まで延びている。

溝の主軸方向はS-81°-Wをとる。規模は長さ約29.0m、幅0.8～1.0m、深さ0.12～0.23mを測る。断面は箱形を呈する。

出土遺物はない。溝の時期は平安時代以降である。

第5号溝跡（第42・44図）

第5号溝跡はD-3～6グリッドに位置している。溝は西-東方向に延びている。西端は第1号溝跡と接続するが、新旧関係は明らかでない。

溝の主軸方向はN-86°-Eをとる。規模は長さ約24.0m、幅0.6m、深さ0.02～0.08mを測る。ごく浅く残されていた。

出土遺物は少なく、4点を図示した(第46図)。第46図8～10は須恵器の坏、11は須恵器の高台付塊である。

遺物はいずれも古代であり、溝の時期は古代以降と考えられる。

第6号溝跡（第41・44図）

第6号溝跡はB-3・4、C-1～4グリッドに位置している。溝は北東-南西方向に延びる。

攪乱を受けるほか、第1号住居跡、第4号溝跡に壊される。北東側は調査区域外まで延びている。

溝の主軸方向はS-23°-Wをとる。規模は、長さ約27.5m、幅0.8～1.2m、深さ0.1～0.24mを測る。断面は浅い皿状である。

出土遺物は少ない。8点を図示した(第46図)。第46図12、19は土師器である。12は坏、19は甕である。13～16は須恵器の坏、17は須恵器の高台付塊である。18は須恵器の甕の破片である。12および14は他の土器よりやや古く、混入の可能性がある。

遺物はいずれも古代であり、溝の時期は古代と考えられる。

第7号溝跡

欠番。

調査区北壁基本層序13層として溝状の落ち込みが確認され、当初は第7号溝としたが、平面的に全く確認されなかったため、欠番とした。

第8号溝跡（第43・45図）

第8号溝跡はG-1～3、H-1グリッドに位置している。溝は南西から東方向に湾曲して延びている。

東側で第2号溝跡と、南西端で第9号溝跡と接続しているが、互いの新旧関係は不明である。西側は調査区域外まで延びている。

溝の主軸方向はN-89°-Wをとる。規模は長さ26.0m、幅0.7～2.5m、深さ0.13～0.44mを測る。断面は逆台形を呈する。

出土遺物はほとんど無い。土器の小片のほか、常滑産の甕の破片が1点出土したが、小片のため図示出来なかった。

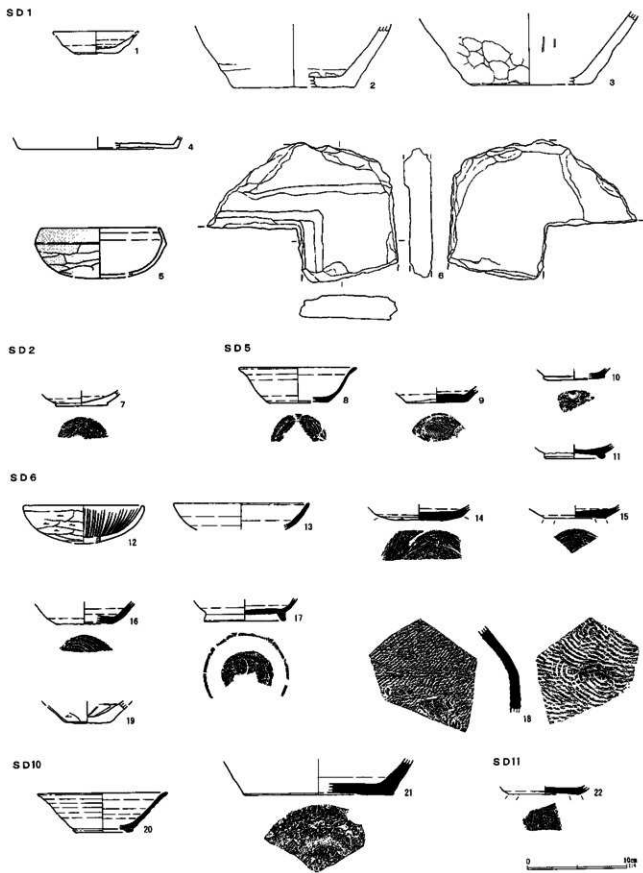
溝の時期は中世と考えられる。

第9号溝跡（第43・45図）

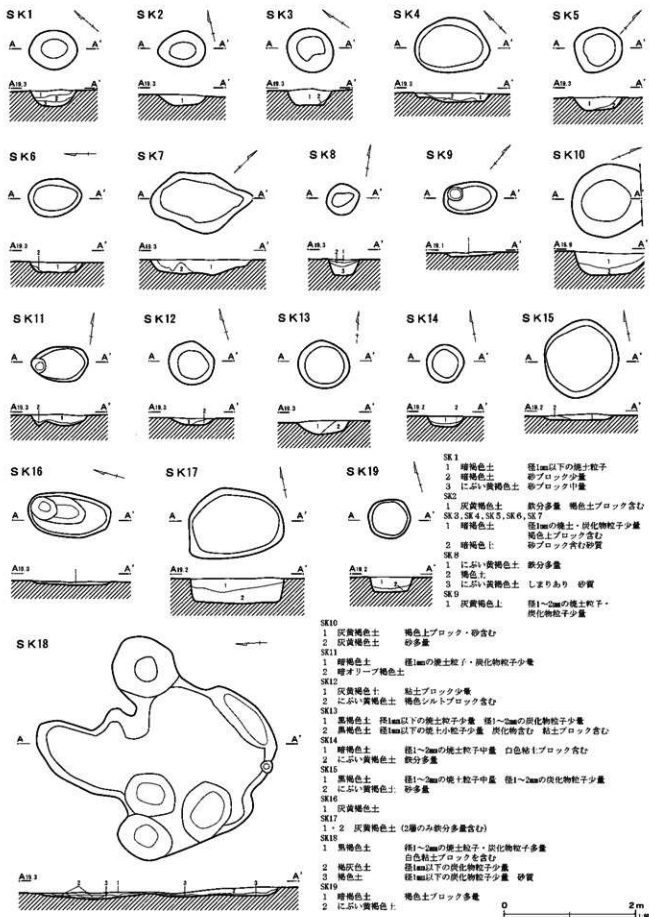
第9号溝跡はG-1グリッドに位置している。溝は北西-南東方向に延びている。南東端は第8号溝跡にぶつかるが、新旧関係は不明である。西端は調査区域外へと延びる。

溝の主軸方向はN-64°-Wをとる。規模は長さ3.0m、幅0.8m、深さ0.11～0.19mを測る。

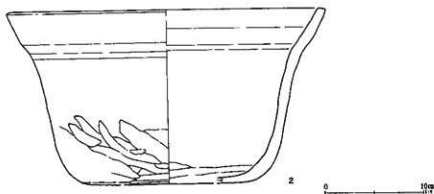
出土遺物はなく、時期は不明である。



第46图 溝跡出土遺物



第47図 土坑



第48図 第17号土坑出土遺物

第14表 第17号土坑出土遺物観察表(第48図)

採戻番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
48 1	土器	かわらけ		[2.0]	(6.1)	白粒 黒粒 針 砂	普通	晴褐	20	酸化焙焼成
48 2	土器	内耳鉢	(32.2)	[17.6]	(17.8)	白粒 角 英 砂 礫	普通	黒	30	外面に厚く炭化物付着

第10号溝跡 (第43・45図)

第10号溝跡はI-0~6グリッドに位置している。溝は東西方向に延び、西側は不整形に広がって立ち上がり、東端は調査区外へ続くと見られる。

第11号溝跡と平行に延びており、主軸方向はN-85°-Eをとる。規模は長さ54.5m、幅0.7~3.3m、深さ0.09~0.17mを測る。断面は浅い皿状である。

出土遺物は少なく、2点を図示した(第46図)。第46図20は須恵器の高台付埴、21は須恵器の甕である。溝の時期は古代以降である。

第11号溝跡 (第43図)

第11号溝跡はI-3・4・5グリッドに位置している。溝は東西方向に延びている。

第10号溝跡に平行に延び、東西の延長は不明である。主軸方向はN-87°-Eをとる。規模は長さ約18.0m、幅0.8m、深さ0.03~0.06mを測る。断面は浅い皿状である。

出土遺物は少なく、1点を図示した(第46図)。第46図22は須恵器の環の破片である。

第10号、第11号溝跡は並行に構築され、東西に直線的に延びる。調査時に硬化面等は確認されなかったが、道路跡の可能性もあろうか。溝の時期は古代以降である。

(3) 土坑

調査区内から土坑が19基検出された。形態は円形ないし楕円形で、深さ20cm程度である。出土遺物は少ないが、第13号、第16号、第17号土坑から見て、一部は中世の墓塚であると考えられる。

第1号土坑 (第47図)

C-3グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-45°-Wをとる。規模は長軸0.7m、短軸0.58m、深さ0.23mを測る。

1層の土は第3号~第7号土坑の1層とよく似通っている。

出土遺物はなく、時期は不明である。

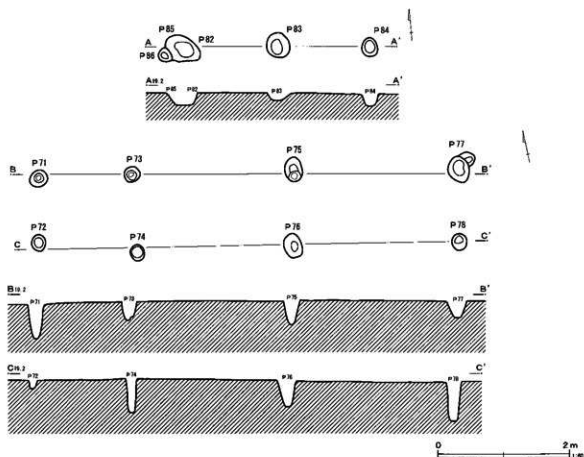
第2号土坑 (第47図)

C-4グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-82°-Wをとる。規模は長軸0.62m、短軸0.52m、深さ0.17mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第3号土坑 (第47図)

C-3グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-1°-Eをとる。規模は長軸0.72m、短軸0.64m、深さ0.24mを測る。



第49図 ビット

土層は第7号土坑まで共通し、1層に褐色土ブロックを含む。

出土遺物は小片のみで、時期は不明である。

第4号土坑 (第47図)

C-4グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-46°-Wをとる。規模は長軸1.12m、短軸0.8m、深さ0.13mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第5号土坑 (第47図)

C-4グリッドに位置している。平面形は不整形である。主軸方向はN-22°-Eをとる。規模は長軸0.72m、短軸0.62m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第6号土坑 (第47図)

C-4グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-3°-Wをとる。規模は長軸0.8m、短軸0.56m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第7号土坑 (第47図)

D-3グリッドに位置している。平面形は不整形楕円形である。主軸方向はN-40°-Eをとる。規模は長軸1.54m、短軸0.88m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第8号土坑 (第47図)

D-3グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-60°-Eをとる。規模は長軸0.5m、短軸0.46m、深さ0.25mを測る。

出土遺物は小片のみで、時期は不明である。

第9号土坑 (第47図)

C-4グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-40°-Eをとる。規模は長軸0.82m、短軸0.46m、深さ0.65mを測る。

出土遺物は小片のみで、時期は不明である。

第10号土坑 (第47図)

B-3グリッドに位置している。平面形は円形である。北側が一部調査区域外に出る。主軸方向はN-22°-Wをとる。規模は長軸1.2m、短軸1.06m、深さ0.42mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第11号土坑 (第47図)

C-1グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-85°-Eをとる。規模は長軸0.82m、短軸0.52m、深さ0.17mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第12号土坑 (第47図)

D・E-2グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-62°-Wをとる。規模は長軸0.68m、短軸0.62m、深さ0.11mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第13号土坑 (第47図)

E-1グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-86°-Eをとる。規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。

出土遺物はほとんど無い。古瀬戸の破片が1点あるが、小片のため図示出来なかった。時期は中世である。

第15表 ビット一覧(第41図～第43図)

Pit番号	グリッド	直径(m)	深さ(m)	Pit番号	グリッド	直径(m)	深さ(m)
1	D 4	0.32	0.13	48	C 3	0.22	0.21
2	D 5	0.24	0.24	49	C 3	0.20	0.26
3	D 5	0.28	0.09	50	C 3	0.20	0.22
4	D 5	0.24	0.27	51	C 3	0.24	0.61
5	D 5	0.22	0.24	52	C 3	0.26	0.21
6	E 6	0.30	0.23	53	C 3	0.24	0.46
7	E 6	0.24	0.26	54	C 5	0.20	0.20
8	E 6	0.28	0.25	55	D 5	0.18	0.20
9	E 6	0.24	0.16	56	C 2	0.24	0.19
10	E 6	0.30	0.67	57	C 2	0.22	0.31
11	D 6	0.28	0.27	58	C 2	0.22	0.20
12	E 6	0.30	0.65	59	C 2	0.28	0.46
13	E 6	0.30	0.46	60	C 2	0.18	0.11
14	D 6	0.20	0.13	61	C 2	0.20	0.41
15	D 6	0.20	0.22	62	C 2	0.18	0.28
16	D 6	0.30	0.60	63	C 2	0.28	0.28
17	D 6	0.36	0.25	64	C 2	0.22	0.24
18	D 6	0.24	0.48	65	C 2	0.20	0.42
19	D 6	0.44	0.09	66	D 2	0.20	0.11
20	D 6	0.36	0.08	67	C 2	0.20	0.09
21	D 6	0.22	0.53	68	C 1	0.44	0.09
22	D 6	0.26	0.32	69	C 2	0.18	0.12
23	D 6	0.28	0.27	70	C 2	0.20	0.16
24	D 6	0.16	0.05	71	E 5	0.26	0.50
25	D 6	0.26	0.28	72	E 5	0.24	0.13
26	D 6	0.12	0.13	73	E 5	0.22	0.29
27	D 6	0.22	0.31	74	E 5	0.24	0.50
28	E 6	0.28	0.30	75	E 6	0.36	0.45
29	E 6	0.30	0.70	76	E 6	0.36	0.40
30	E 6	0.12	0.13	77	E 6	0.48	0.26
31	E 6	0.22	0.26	78	E 6	0.24	0.59
32	E 6	0.30	0.26	79	E 6	0.14	0.13
33	E 6	0.26	0.27	80	F 6	0.24	0.20
34	E 4	0.22	0.21	81	C 2	0.16	0.16
35	E 4	0.20	0.35	82	E 3	(0.36)	0.17
36	D・E 5	0.18	0.22	83	E 3	0.38	0.11
37	D 4	0.24	0.58	84	E 3	0.28	0.17
38	D 4	0.22	0.22	85	E 3	(0.22)	0.18
39	D 4	0.18	0.27	86	E 3	0.22	0.21
40	D 3	0.20	0.21	87	D 1	0.36	0.18
41	D 3	0.26	0.28	88	D 1	0.22	0.15
42	D 2	0.20	0.47	89	D 1	0.46	0.13
43	D 2	0.22	0.36	90	D 1	0.54	0.28
44	D 2	0.22	0.51	91	C 2	0.16	0.14
45	C 2	0.22	-	92	C 2	0.18	0.17
46	C 3	0.24	0.24	93	C 2	0.24	0.27
47	C 3	0.18	0.22	94	C 2	0.20	0.19

第14号土坑 (第47図)

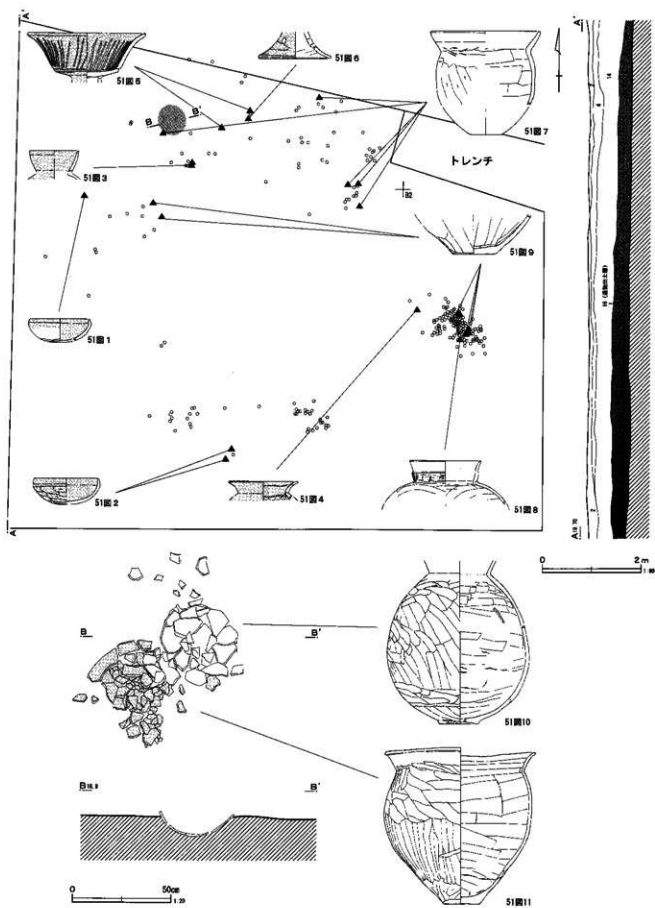
F-6グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-0°-Eをとる。規模は長軸0.58m、短軸0.56m、深さ0.18mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

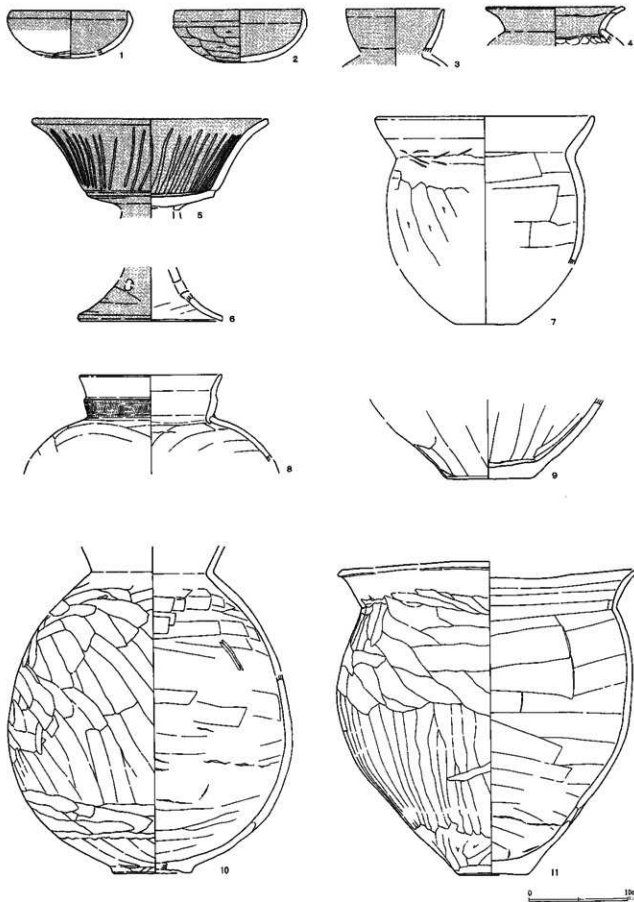
第15号土坑 (第47図)

E・F-5・6グリッドに位置している。平面形は不整形である。主軸方向はN-16°-Eをとる。規模は長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.16mを測る。

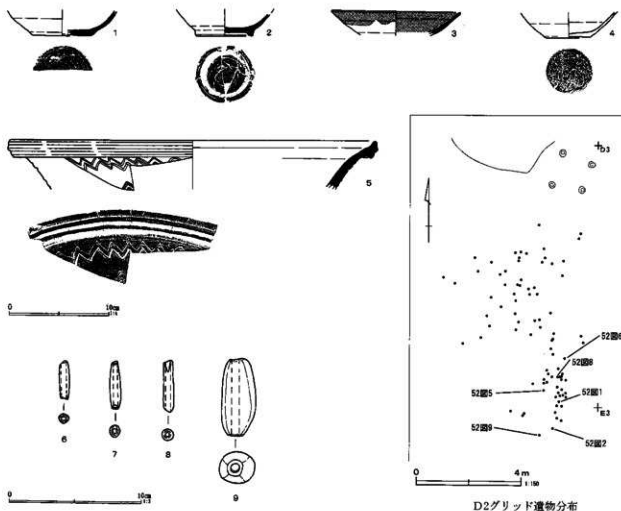
出土遺物はなく、時期は不明である。



第50図 遺構外遺物出土状況



第51图 遗構外出土遺物(1)



第52図 遺構外出土遺物(2)

第16号土坑 (第47図)

G-4グリッドに位置している。平面形は楕円形である。主軸方向はN-12°-Wをとる。規模は長軸1.24m、短軸0.64m、深さ0.05~0.2mを測る。

遺構上面から人の歯が出土した。歯冠部分のみを残し、計15点が検出された。他に出土遺物はないが、おそらく墓塚と考えられる。時期は不明である。

第17号土坑 (第47図)

E・F-6グリッドに位置している。平面形は不整形楕円形である。主軸方向はN-67°-Eをとる。規模は長軸1.4m、短軸1.06m、深さ0.17mを測る。

覆土中から遺物が2点出土した(第48図)。

時期は中世と考えられる。

第18号土坑 (第47図)

F-5グリッドに位置している。平面形は不整形である。主軸方向はN-5°-Eをとる。規模は長軸3.6m、短軸2.48m、深さ0.11mを測る。

覆土の1層は炭・焼土を主体とする。出土遺物はなく、時期は不明である。

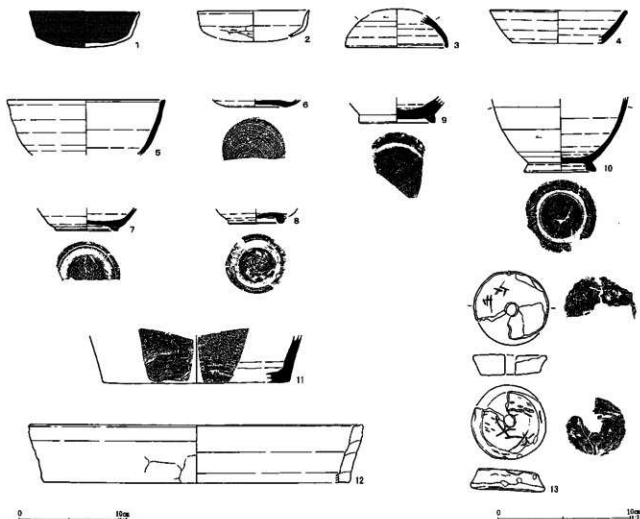
第19号土坑 (第47図)

H-5グリッドに位置している。平面形は円形である。主軸方向はN-11°-Eをとる。規模は長軸0.64m、短軸0.58m、深さ0.23mを測る。

出土遺物はなく、時期は不明である。

(4) ビット (第41~43図・第13表)

調査区内から、多数のビットが検出された。ピッ



第53図 遺構外出土遺物(3)

トは調査区北側に分布する。P71~78、P82~86が列状に並ぶが、性格は不明である(第49図)。

(5) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物はグリッド単位で2ヶ所、集中的に検出された他、調査区全体から出土している。

調査区北西のトレンチ下(基本層序16層)から古墳時代の土器が検出され、古墳時代の遺構確認のため、調査区北西隅を約10m四方に渡って深く掘り下げた(第50図)。

A-1・B-1グリッドを中心に検出された土器は、広範囲に分布する。土器はあまり水磨されない。遺構は全く確認されず、遺物の時期も五領式を中心とするものの、古墳時代前期~後期とばらつきがある。従って出土土器は、周辺から包含層中に流れ込

んだものと考えられる。

A・B-1・2グリッドの出土遺物は11点を図示した(第51図)。いずれも土師器で、1・2は環、3・4は小型壺である。5・6の高環は同一個体の可能性がある。7、11は甕、8~10は壺である。

D-2グリッドでは同様に、古代の土器が比較的まとまって検出された。遺構は確認されなかったため、遺構外として扱った(第52図)。

出土遺物は9点を図示した(第52図)。第52図1は須恵器の環、2は須恵器の高台付坩、3は灰釉の皿、4は土師器の環、5は須恵器の甕である。6~9は土錘である。土錘は調査区内でここからのみ出土している。

その他の遺構外出土遺物として13点を図示した(第53図)。第53図1・2は土師器の環、3~11は須

第16表 遺構外出土遺物観察表(第51・52・53図)

神田番号	出土位置	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考		
51	1	B	1	土師器	環	(11.8)	[4.6]		白粒 角 赤粒 黒粒 砂	普通	明赤褐	45	口縁部外面、内面赤彩
51	2	B	1	土師器	環	12.8	5.3		白粒 角 赤粒 黒粒 砂	良好	にぶい赤褐	70	内外面赤彩 比企型環
51	3	A	1	土師器	小型壺	(9.8)	4.4		白粒 赤粒 黒粒 砂	普通	にぶい橙	45	
51	4	B	1	土師器	小型壺	(13.8)	[3.8]		白粒 赤粒 黒粒 針 砂	良好	にぶい橙	30	外面、口縁部内面赤彩
51	5	A	1	土師器	高環	(23.6)	[8.2]		白粒 赤粒 黒粒 針 砂	良好	橙	45	内外面赤彩
51	6	A	1	土師器	高環		[4.2]	14.4	白粒 赤粒 黒粒 針 砂	良好	橙	70	内外面赤彩 円孔一個残存
51	7	A	1	土師器	甕	(21.6)	[15.0]	(20.0)	白粒 赤粒 黒粒 砂 礫	良好	明赤褐	30	
51	8	B	1	土師器	壺	(14.2)	[8.8]		白粒 赤粒 黒粒 砂 礫	良好	にぶい赤褐	40	受口状口縁
51	9	B	1	土師器	壺		[8.0]	9.0	白粒 角 赤粒 針 砂	良好	にぶい橙	60	
51	10	A	1	土師器	壺	[29.5]		7.8	白粒 英 赤粒 砂 礫	普通	明赤褐	60	
51	11	A	1	土師器	甕	29.6	31.8	7.2	白粒 英 赤粒 砂 礫	普通	明赤褐	85	
52	1	D	2	須恵器	環		[2.6]	(6.0)	白粒 赤粒 黒粒 砂	不良	灰黄褐	35	産地不明 酸化焙焼成灰味
52	2	E	2	須恵器	高台環		[2.7]	5.7	白粒 黒粒 針 砂	不良	灰白	80	
52	3	D	2	灰種	皿	(13.0)	[2.5]		白粒 黒粒 砂	良好	灰白	30	灰種遺掛
52	4	D	2	土師器	環		[2.6]	4.6	白粒 赤粒 黒粒 砂	不良	橙	80	胎土砂粒多い
52	5	D	2	須恵器	甕	(37.0)	[5.0]		白粒 黒粒 砂 礫	良好	黒	5	山形文(籠指) 南比企産か
52	6	D	2	土製品	土鍾	孔径0.3	長さ(2.5)	厚さ0.6	幅0.6 重さ1.10	普通	にぶい橙	80	胎土砂粒含 端部斜め
52	7	D	2	土製品	土鍾	孔径0.3	長さ3.1	厚さ0.8	幅0.7 重さ1.88	普通	褐	90	胎土砂粒含 端部斜め
52	8	D	2	土製品	土鍾	孔径0.3	長さ3.4	厚さ0.7	幅0.7 重さ2.33	普通	黒褐	90	胎土砂粒多 端部斜め
52	9	E	2	土製品	土鍾	孔径0.6	長さ5.0	厚さ2.1	幅2.3 重さ26.05	普通	にぶい黄褐	100	胎土砂粒多 端部平坦
53	1	C	6	土師器	環	(11.0)	3.5		白粒 赤粒 黒粒 砂	良好	橙	70	黒色有段口縁環(内面黒彩残り悪い)
53	2	B	2	土師器	環	(10.0)	[2.7]		赤粒 砂	普通	明褐	15	胎土赤色粒子多
53	3	D	4	須恵器	環甕	(11.2)	[3.3]		白粒 黒粒	良好	灰	10	産地不明 断面内面セピア色
53	4	B	3	須恵器	環	(13.6)	3.3	(9.2)	白粒 黒粒 針 砂	良好	灰白	25	南比企産
53	5	B	2	須恵器	埴	(16.0)	[5.6]		白粒 黒粒 針 砂	普通	灰	20	南比企産
53	6	H	1	須恵器	環		[0.8]	6.2	白粒 黒粒 針 砂	良好	青灰	50	南比企産
53	7	I	2	須恵器	高台環		[2.3]	(6.0)	白粒 黒粒 針 砂	不良	灰白	50	南比企産
53	8	G	2	須恵器	高台環		[1.6]	5.4	白粒 黒粒 砂 礫	普通	灰	60	南比企産か
53	9	C	1	須恵器	瓶		[2.6]	7.6	白粒 黒粒 砂	良好	灰白	60	底部内面自然釉付着 朝西産か
53	10	C	5	須恵器	長頸瓶		[7.4]	7.3	白粒 黒粒 砂	良好	灰	60	産地不明(南比企か)
53	11	C	1	須恵器	甕		[4.8]	(18.8)	白粒 赤粒 黒粒 砂	良好	黄灰	10	内面焼灰 体部外面 平行押き僅かに残る
53	12	E	3	土器	焙烙	(33.6)	5.8	(31.0)	白粒 角 赤粒 黒粒 砂	普通	黒褐	10	
53	13	D	4+5	土製品	紡錘車	孔径0.9	径5.7	厚さ1.5	重さ40.67	良好	黄灰	70	摺痕及び爪痕 焼き須恵器に近い

第17表 遺構名新旧対応表

遺跡名	新	旧	遺跡名	新	旧
西浦遺跡	第47号住居跡 (SJ47)	第1号住居跡 (SJ1)	野本氏館跡	第22号溝跡 (SD22)	第2号溝跡 (SD2)
	第48号住居跡 (SJ48)	第2号住居跡 (SJ2)		第23号溝跡 (SD23)	第1号溝跡 (SD1)
	第49号住居跡 (SJ49)	第3号住居跡 (SJ3)		第24号溝跡 (SD24)	第3号溝跡 (SD3)
	第322号土坑 (SK322)	第1号土坑 (SK1)		第25号溝跡 (SD25)	第4号溝跡 (SD4)
*山王裏遺跡、銭塚遺跡に変更は無い。			第41号土坑 (SK41)	第1号土坑 (SK1)	

恵器である。12は近世の焙烙。13は紡錘車である。

と見られる。

両面に捺痕、圧痕があるが、意図的な文様ではない

VII 調査のまとめ

1. 西浦遺跡・野本氏館跡・山王裏遺跡

(1) 弥生時代～古墳時代初頭

今回の調査では、弥生時代～古墳時代初頭の遺構として、住居跡が野本氏館跡で2軒、西浦遺跡で2軒検出された。二つの遺跡は互いに隣接した一連の遺跡である。

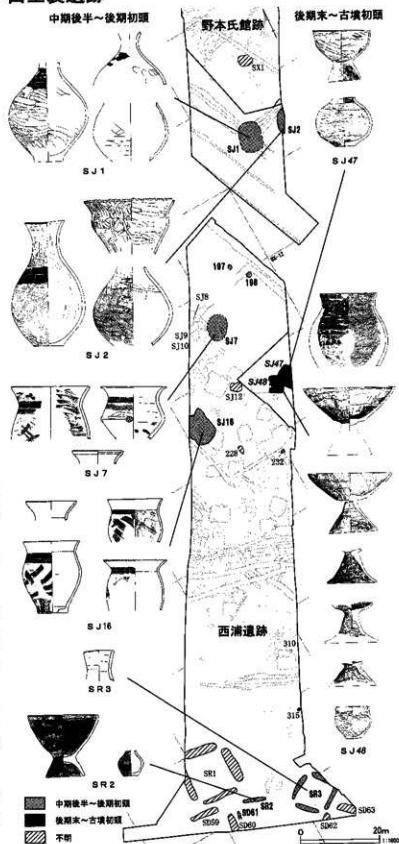
国道407号関係の調査では、過去にも弥生～古墳時代の遺構が検出されている。その内訳を見ると、住居跡が弥生時代3軒(SJ7、SJ12、SJ16)、古墳時代後期5軒(SJ11、SJ17～19、SJ26)、不明3軒(SJ8～10)であり、他に方形周溝墓3基、土坑13基(弥生土器をともなうのは6基)がある(山本・西井1997)。方形周溝墓に隣接して5条の溝が認められるが(SD59～63)、SD61は恐らくSR2の一部とみられ、他の溝も方形周溝墓の一部と考えられる。

今回の調査分も合わせて弥生時代の遺構を数えれば、住居跡7軒、方形周溝墓3基(或いは5基)、土坑6基となる。ここでは主として、今回資料の得られた弥生時代の遺構・遺物について概観する。

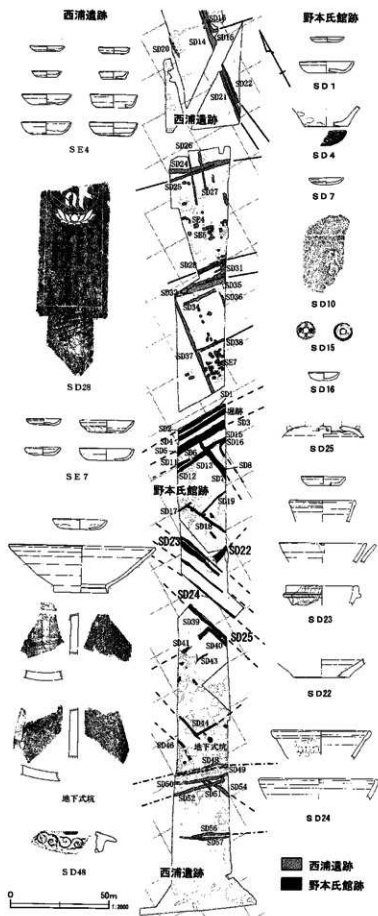
西浦遺跡・野本氏館跡における弥生時代の遺構・遺物は、弥生中期後半～後期初頭と、弥生後期末～古墳時代初頭とに大きく二分される。

弥生中期後半～後期初頭の遺構としては、野本氏館跡のSJ1、SJ2、西浦遺跡のSJ7、SJ16、SR2、SR3、SK197、SK198などがある。これらの遺構はさらに中期後半と後期初頭の二時期に分けることが可能である。

中期後半の遺構はSJ1、SJ2、SR2、



第54図 西浦遺跡・野本氏館跡の遺構分布(弥生～古墳初頭)



第55図 西浦遺跡・野本氏館跡の遺構分布(中世ほか)

SR 3があげられる。SK197、SK198も中期後半の可能性がある。

SJ 1、SJ 2の2軒は共に焼失住居である。SJ 1は住居の大半が失われていたが、炭化材や土器が住居北端で複数検出された。SJ 2は住居西端を調査し、壺や甕、高環が出土した。遺物についてみると、壺(第22図-1)は完形で縄文が細かい点が特徴的である。甕(第22図-3)は口唇部に交互指頭押圧が施されており、宮ノ台式の甕に一般的な特徴が認められる。

後期初頭の遺構としてはSJ 7、SJ16がある。両者はいわゆる櫛描文土器の甕を主体的に含み、近年の弥生土器編年の研究を参照すれば(松本2003、柿沼2006など)、この2軒は弥生後期初頭に位置づけられよう。

弥生後期末～古墳時代初頭の遺構は、今回報告したSJ47、SJ48があげられる。SJ47はSJ48に壊されており、少なからず時間幅を持つ。土器はSJ47で壺と高環、SJ48で甕、高環、鉢が検出された。SJ48は甕がやや床面から浮くが他は床面直上で、住居の一括資料と言える。

遺物を見ると、高環が坏部に明瞭な稜を持つなど、新しい特徴が認められる(第10図-2、4、6、21)。今回、注意される資料に甕がある。甕(第10図-1)はいわゆる吉ヶ谷式だが、櫛描文を部分的に施すのが特徴的である。縄文と櫛描文を同時施文するのは、樽式と赤井戸・吉ヶ谷式の折衷土器と考えられ、群馬県の鍋川流域に多い。類例は管見に触れた限り認められないが、南蛇井増光寺遺跡DS区10号住居例(新井・飯塚1997、P109)がやや似ていると言えようか。いずれにしても、埼玉県、群馬県域における折衷土器の時代的位置付けが今後重要となろう。

なお時期不明としたSR 1には古墳時代前期の土器も含まれており、中期後半～後期初

頭と同様、弥生後期末～古墳時代初頭にも居住域・墓域が隣接していたことが考えられよう。

以上のように西浦遺跡では、段丘上に居住域、その南縁辺に墓域の広がる集落が、弥生中期後半以降、古墳時代に至るまで断続的に営まれていた。

(2) 古代以降

古代以降では、西浦遺跡で平安時代の住居跡1軒、野本氏館跡で溝跡4条、山王裏遺跡で溝跡11条が今回検出された。古代として明確なのは西浦遺跡の第3号住居跡（平安時代）のみであり、ここでは中世以降について主として述べる（第55・56図）。

史料等における野本氏館跡

まず野本氏館跡の従来の知見を整理する（石川1998、野沢1999、小林2001、嵐山史跡の博物館2006、水口2007など）。現在の東松山市宇野本の地に無量寿寺がある。境内から江戸時代に梵鐘が掘り出され、拓本が残されている。銘文から建長6年（1254）に紀忠清と橋氏女が大施主となり、野本寺（無量寿寺のこと）に奉納されたものと分かる。無量寿寺は、鎌倉時代の木造阿彌陀如来坐像を有しており、寺の起源は13世紀半ばに遡ると見られる。

無量寿寺のすぐ南の、野本將軍塚古墳の後円部墳頂に利仁神社が鎮座する。利仁神社は無量寿寺の鎮守と言われ、藤原利仁を祀る。神社境内から明治34年に経塚が6基発見された。出土した銅製経筒の銘文から、建久7年（1196）に応順大徳と橋氏女が檀越・施主となり造営されたことが分かる。また他に副葬された鏡二面の墨書や釘書きから、源新次郎と藤原氏が結縁者として埋経に関与したことが分かる。

野本氏館跡の遺跡範囲は、無量寿寺、利仁神社をその中に含む。野本氏は鎌倉幕府の御家人であり、藤原利仁の末裔とされている。初代の野本基員が武藏国に移住したのは12世紀後半とされる。

水口由紀子氏は野本氏の祖先信仰から古墳が藤原利仁の墓とされたのではないかと述べている（水口2007）。野本氏館と無量寿寺、利仁神社の関係を直

接結び付ける資料は無いが、藤原氏に縁のある者が利仁を祀っており、子孫を名乗る野本氏が12世紀後半～13世紀前半に館を構え、寺や神社と何らかの関わりを持っていたことが推測される。

野本氏館跡の遺構と年代

野本氏館跡では今回、4条の溝が発掘された。館跡では合計25条の溝と堀跡1条が検出されている。

野本氏館跡の溝跡の多くは、遺跡範囲の北・西縁に沿って、現在の道路とほぼ同方向に掘り込まれる。遺跡北側ではほぼ東西方向に、遺跡西側では北西～南東方向に延びる。東西方向の溝（SD1～6、11～15、堀跡）と北西～南東方向の溝（SD39、SD23・24・25）の延長は未確認だが、遺跡の北西隅で互いに接続する可能性が高い。

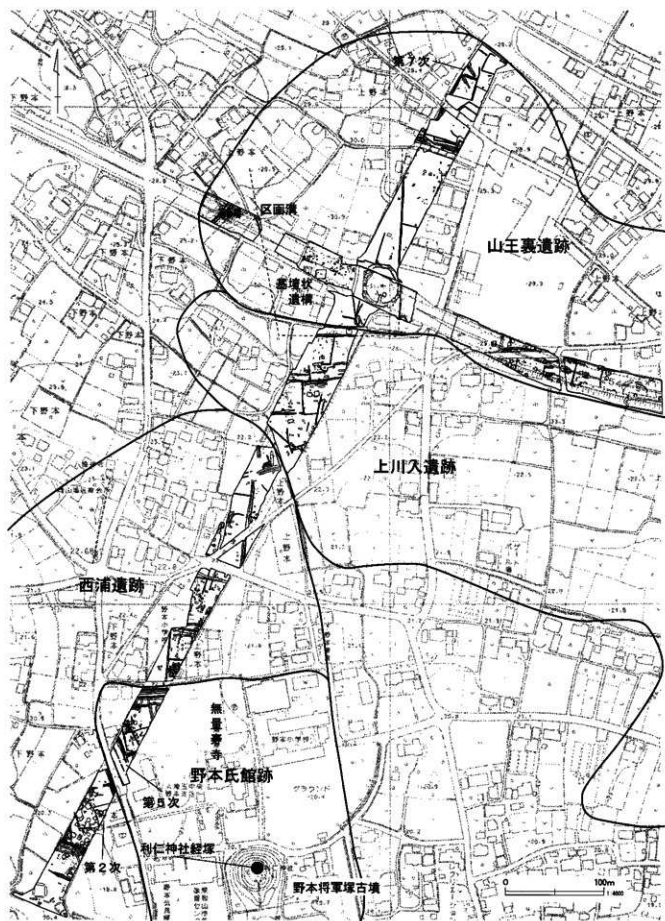
溝跡の新旧関係については、遺跡北側でSD6→SD5→SD4→堀跡と、外側へ何度か掘り直される。堀跡の廃絶が近世に下ることは間違いないが、溝跡の上限は不明である。遺跡西側ではSD22はSD23より新しい。SD23、SD25で13世紀の石鍋や四耳壺が出土し、SD24から15世紀の在産土器が出土した。

西浦遺跡でも13世紀前半の土器や、鎌倉の永福寺と同文の軒瓦が出土しており、野本氏館跡は13世紀前半に館として成立し、15世紀に再び何らかの形で利用されたものと考えることが出来る。

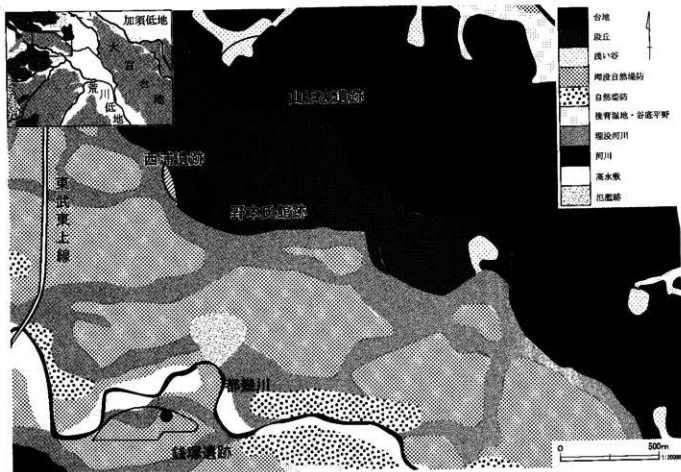
西浦遺跡・野本氏館跡の古代～中世

野本氏館跡内にはSD22のほか、SD7、8、16、18、19など、敷地内を縦横に細かく区分する溝が構築されている。同様の溝跡は、西浦遺跡の過去の調査でも検出されている。

野本氏館跡の南西側ではSD44、46など、北西～南東方向の溝が確認される。SD44はL字で、SD40、41と直角方向を示し、一辺40～50mの方形区画を構成すると考えられる。この南側では軸が更に東に傾いた、西北西～東南東方向の溝も確認される（SD48～SD52）。なおSD56・57は軸方向に近いが、円面硯、朱墨・墨書土器、「私印」の刻印土器、土錘などを出土した古代の遺構であり、これらから比企郡の郡衙



第56図 西浦遺跡・野本氏館跡・山王裏遺跡遺構配置



第57図 調査地点周辺の微地形

関連の遺跡とも言われている(鳥羽・大谷2002)。

野本氏館跡の北東側では、軸方向が全体に東に傾き、南北は北北東-南南西方向、東西は西北西-東南東方向で直交する溝が多数確認される。これらの溝も、一辺30~50m程度の方形区画を構成すると考えられる。

古代・中世の道路と沿線の主要遺跡との関係を明らかにした大澤伸啓氏は、西浦遺跡・野本氏館跡について次のように述べている(大澤2006)。西浦遺跡・野本氏館跡は小規模な溝で区切られる方形区画を持ち、溝以外の遺構は井戸や土坑が主体で方形竪穴を持たず、遺構群全体を囲む堀が存在しない。これは街道沿いに区画された町が広がり、方形館からなる領主等の館跡を伴う、飯村均氏の言う「荒井猫田型」にあたるとしている。県内の類例としては、熊谷市下田町遺跡、川越市河越館跡があり、特に河越館跡は館跡を含むことで共通している。

中世の鎌倉街道上道の下野線は、東松山市高坂周辺を通過していたと推定されている(齋藤2004、浅野2006)。西浦遺跡・野本氏館跡は道路近辺に発達した、中世前半の「宿」と称された都市的な場であった可能性が高いといえよう(大澤2006)。また野本氏館跡では中世後半の遺物も今回検出されており、一帯の中世を考える上で注意すべき資料である。

山王裏遺跡について

山王裏遺跡の今回の調査範囲は、時期不明の溝跡を主体とし、全体として遺構の密度は薄い。第36号溝跡はおそらく18世紀の遺構であり、第33号溝跡はそれ以前、江戸時代前葉と推測される。第40号溝跡も近世の区画溝の可能性もある。

検出された遺構の年代の上限は不明だが、山王裏遺跡にも溝跡は多い。過去に寺院基壇とこれを囲む区画溝が発掘されたが(山本1991・1995、山本・西井1997)、南に隣接する上川入遺跡では、区画溝と同

方向の溝跡が展開する。山千裏遺跡、上川入遺跡の溝跡は恐らく古代郡衙や寺院の関係から生じたもので、西浦遺跡・野本氏館跡の区画溝と同列に論じられないが、集落内を溝で区画する土地利用が平安時代から中世に広く行われていたことは事実であり、土地を区画する行為と都市や村落の関わりについて広く考える必要があろう。

2. 銭塚遺跡

銭塚遺跡の遺構は、古代と中世に大きく分けられる。古代では住居跡1軒(平安時代)、溝跡1条(SD6)がある。SD5、SD10、SD11の3条の溝跡は、遺物から古代以降で、SD3、SD9は時期不明である。

中世として確実なのはSD1、2、4、8の4条の溝と、SK18を除く土坑18基がある。土坑はSK13、16、17の遺物から考え、墓塚から構成される可能性がある。溝跡は中世前半から存在した可能性は否定できないが、全体的に中世後半に属すると見られる。第1号、第2号溝跡は方形区画を構成しているが、時期的には野本氏館跡などの区画溝より新しいと見られ、その性格は必ずしも同一視できない。

銭塚遺跡の遺構を理解するために、都幾川流域の地形から遺跡の立地を考えてみたい。東松山台地と高坂台地の間に広がる低地は都幾川により形成された。沖積低地の形成過程について詳細な研究は少なく、大矢雅彦氏は防災的視点から低地を地形区分し、荒川低地の地形発達史を復元した(大矢ほか1996)。しかしこの研究でも、遺跡発達を意識した細かな地形区分は必ずしも十分でない。第57図に空中

写真判読による調査地点周辺の微地形を示した(1)。

これによると、従来沖積低地と一括されていた地形は、埋没自然堤防と埋没旧河道からなることが明らかである。埋没旧河道は現在の河道と同様に東西方向の流れを示しており、都幾川の蛇行の繰り返しのによって、地形を形成していったことが理解される。

埋没自然堤防は現在の自然堤防と異なり、ごく僅かな高まりでもって認識される。現地表面上での識別は困難だが、埋没旧河道と比較して最大30~40cmの比高差を持つ。現在の自然堤防は、埋没自然堤防と比べても1m近い比高差がある。

各調査地点を第57図上に示すと、銭塚遺跡は都幾川右岸の埋没自然堤防上にほぼ立地している。遺跡の北側は埋没旧河道によって挟られるが、これは発掘調査でも確認されている(富田2005)。調査区北端で、SD1など複数の溝が調査区外に伸びるが、同じ旧河道によって恐らく寸断されるのであろう。

SD1、SD2は出土遺物から中世後半の遺構と考えられる。調査区内で洪水の痕跡は定かでないが、17世紀までに銭塚遺跡は遺跡北側を都幾川によって大きく挟られ、河道の変更に伴って地下に埋没したと推測される。すぐ東に広がる現在の自然堤防は、中世後半以降に形成された可能性があろう。

中世後半の様相は考古学的にまだ明らかでない点が多い。そのような中で、この時期の低地開発を示唆する遺跡が調査された意義は大きいと言えよう。

註(1) 平成17年度(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成(菊地:「都幾川流域の古環境」)の成果による。

引用・参考文献

- 浅野晴樹 1991「東国における中世在地系上器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 pp.55-125
 浅野晴樹 2006「鎌倉街道の考古学」『鎌倉時代の考古学』高志書院 pp.305-316
 浅野晴樹・書巻慎一編 2003『中世東国の世界1 北関東』
 新井 仁・飯塚卓二 1997「南蛇井増光寺遺跡VI」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 安藤広道 1990「神奈川県下末吉古地における宮ノ台式上器の細分」『古代文化』42-6-7 pp.330-340、379-390
 飯村 均 1999「東国の宿・市・津」『中世の道と物流』山川出版社

- 石川安司 1998『東松山市西浦遺跡出土の中世瓦』『比叡丘陵』3・4
- 石塚和則・鈴木孝之・山本 靖・大谷 徹 1991『代正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井汲隆夫・大八木謙司・三水 弘・原 祐一・金子浩吾・榎木 真 1992『内藤町遺跡 遺物編』新市区内藤町遺跡調査会
- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会
- 江原昌俊 2007『東松山市正法寺と周辺遺跡』『武蔵武士と寺院』シンポジウム実行委員会 pp.47-52
- 江原昌俊・大谷 徹 2005『北武蔵における古墳時代中期群集墓の形成』『考古学ジャーナル』528 pp.16-18
- 大木紳一郎 1995『遺物の特徴 弥生土器』『中高瀬観音山遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.229-249
- 大木紳一郎 1997『まとも 弥生時代の遺構と遺物』『南蛇井増光寺遺跡V』群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.680-736
- 大澤伸啓 2006『東山道武蔵路と鎌倉街道上道下野線』『唐澤考古』第25号 唐澤考古会 pp.69-80
- 大谷 徹 2006『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大穴雅彦・高山 一・久保純子編 1996『荒川流域地形分類図説明書』建設省関東地方建設局荒川上流水事務所
- 小川 望 1991『近世江戸の土製火鉢類について』『中世土器の基礎研究VII』日本中世土器研究所 pp.109-133
- 柿沼幹夫 1982『吉ヶ谷土器について』『土曜考古』5 pp.43-78
- 柿沼幹夫 1987『埼玉県北西部地方の櫛歯文土器』『埼玉考古』23 pp.51-81
- 柿沼幹夫 1996『北関東①埼玉県』『関東の方形周溝墓』同成社 pp.247-318
- 柿沼幹夫 2006『岩鼻式土器について』『土曜考古』30 pp.1-28
- 金井真良一 1968『諏訪山古墳群』東松山市教育委員会
- 菊地 真 2006『東松山市反町遺跡(第1次)の調査』『第39回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 pp.20-23
- 北島シボ準備委員会編 2003『埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代-弥生時代の新展開』別冊7 埼玉考古学会
- 木戸雅孝 1993『石鑄の生産と流通について』『中世土器の基礎研究IX』日本中世土器研究会 pp.127-143
- 久保純子 2001『荒川扇状地とその周辺の丘陵・台地』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 pp.198-200
- 久保純子・小池一之 2000『利根川・荒川・中川流域低地の地形』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 pp.204-211
- 岡岡真理子編 2005『埼玉の戦国時代 城』埼玉県立歴史資料館
- 黒坂純二・宅間清公 2007『埼玉県木曾免遺跡と御新田遺跡』『考古学ジャーナル』553 pp.41-45
- 古代交通研究会編 2004『日本古代道路事典』八木書店
- 小林謙一 1992『暖房具にみる考古資料と民具資料の関係』『考古学』と江戸文化』江戸遺跡研究会 pp.218
- 小林謙孝 2001『埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について』『埼玉考古』36 pp.153-169
- 埼玉県 1982『新編埼玉県史 資料編2-原始・古代 弥生・古墳』埼玉県
- 埼玉県 1989『新編埼玉県史 資料編9-中世5 金石文・奥書』埼玉県
- 埼玉県教育委員会『埼玉の遺跡マップ』<http://www.saimaizou.jp>
- 埼玉県立埋蔵文化財センター・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2004『鉄塚・城敷遺跡』平成16年第1回遺跡見学会資料
- 埼玉県立埋蔵文化財センター・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005『わかし、わかしの高塚』平成17年度第1回遺跡見学会資料
- 埼玉県立嵐山史跡の博物館 2006『企画展 武蔵武士と寺院』埼玉県立嵐山史跡の博物館
- 齋藤慎一 2004『南関東の都市と街道』『中世東国の世界2 南関東』高志書院 pp.151-180
- 塩野 博 2004『埼玉の古墳 比企・秩父』さきたま出版会
- 史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会 2005『シンポジウム 埼玉の戦国時代-検証 比企の城』同左
- 瀬戸市埋蔵文化財センター編 1997『「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界」の記録』『研究紀要』5 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 高田清輔 2001『関東地方出土の滑石製石鏡』『埼玉考古』36 埼玉考古学会 pp.137-152
- 宅間清公 2006『吉ヶ谷土器をめぐる問題』『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.121-127
- 中世を歩く会編 2002『在地土器検討会-北武蔵のカワラケ 記録集』中世を歩く会
- 鳥羽政之・大谷 徹編 2002『埼玉考古学会シンポジウム-坂東の古代官衙と人々の交流』別冊6 埼玉考古学会
- 富田和夫 2005『東松山市鉄塚・城敷遺跡(第2次)の調査』『第38回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 pp.14-17
- 野沢 均 1999『埼玉の経線』『考古学論究』6 立正大学考古学会 pp.43-54
- 服部敬史 1997『中世食器の地域性3 関東・甲信』『国立歴史民俗博物館研究報告』71 pp.90-95
- 東松山市 1985『東松山市の歴史』中巻 東松山市
- 藤尾慎一郎 2004『佐倉と江戸』『佐倉城跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館 pp.227-259
- 藤澤良祐 2001『埋納された古瀬戸製品』『研究紀要18』瀬戸市歴史民俗資料館 pp.1-88
- 堀内秀樹 1997『東松山市本郷境内の遺跡における年代的考察』『東松山市埋蔵文化財調査研究年報』1 pp.279-305
- 堀川万吉 1986『埼玉県の地形と地質 1.地形』『新編埼玉県史 別編3自然』埼玉県 pp.7-28
- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス-日本とその周辺』東京大学出版会
- 松本 完 2003『後期弥生土器形成過程の一様相』『埼玉考古』38 埼玉考古学会 pp.119-138
- 水口山紀子 2001『東松山市宿ヶ谷戸遺跡の再検討』『研究紀要』23 埼玉県歴史資料館 pp.1-16
- 水口山紀子 2007『武蔵武士と経線』『武蔵武士と寺院』『武蔵武士と寺院』シンポジウム実行委員会 pp.47-52
- 水本和美編 1998『伝中・上富上・前川』豊島区教育委員会
- 山本 慎 1991『山王裏・中原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 慎 1995『山王裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 山本 慎・西井幸夫 1997『山王裏/上川入/西浦/野本氏館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団